ISSN 1346-261X

国際子ども図書館の窓

子どもの本は
世界をつなぎ、
未来を拓く！

第12号
2012.9

表紙デザイン：熊谷　博人氏

【写真　国際子ども図書館の活動　2011.1-2012.3】

日本ペンクラブ共催講演会「いま、韓国の子どもの本は？」
講師：大竹　聖美氏（右）、クォン・ユンドク氏（左）
（2011年１月22日）　p.70

展示会「日本の子どもの文学——
国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」
（2011年２月19日～開催中）
p.42～46、p.76～77

講演会「日本の子どもの文学―
昨日・今日・それから」
講師：神宮　輝夫氏（右）、
　　宮川　健郎氏（左）
（2011年５月14日）　p.77

日本ペンクラブ共催講演会「いま、オランダ・ベルギーの子どもの本は？」
講師：野坂　悦子氏（右）、キティ・クローザー氏（左）、2011年７月23日）
p.71

展示会「世界をつなぐ子どもの本
―2010年国際アンデルセン賞・
IBBY オナーリスト受賞図書展」
（2011年８月６日～９月11日）
p.77

展示会「ヴィクトリア朝の子どもの本：イングラムコレクションより」
（2011年10月８日～12月25日）
p.47～51、p.77

子どものための秋のお楽しみ会
「ゴリラの絵本と飼育員さんのおはなし」
（2011年11月５日・６日）
p.74～75

児童文学連続講座
（2011年11月７日～11月８日）
p.69～70

講演会「谷川俊太郎さんに聞く
―詩は絵本、絵本は詩」
講師：谷川　俊太郎氏（右）、
　　宮川　健郎氏（左）
（2012年２月18日）　p.77

（写真撮影：青柳聡氏）

東京・春・音楽祭共催
子どものための絵本と音楽の会
「はろるどまほうのくにへ」
（2012年３月25日）　p.75

はじめに

『国際子ども図書館の窓』第12号は、2011年１月から2012年３月までの国際子ども図書館の活動を顧みました。振り返りますと、東日本大震災の惨禍への厳粛な思いを新たにいたします。震災からの復興の１年、国立国会図書館でも、独自の支援策を模索してまいりました。国際子ども図書館で、「学校図書館セット貸出し」を、被災地の学校を中心に送料無料でご利用いただいたのもその一環です。今後も微力ながら被災地の皆様にお役に立てることを考えていきたいと思っております。

さて2011年度は、国際子ども図書館の増築棟工事に着工した年でもあります。国際子ども図書館の荘厳な建物は、それゆえの制約もあり、サービスの拡充にも限界がありました。増築棟竣工の暁には、これらの制約が大幅に解消されます。2011年３月に「国際子ども図書館第２次基本計画」を公表し、竣工時2015年度に実現すべきサービスの具体化に向けて検討を進めております。

2011年度はまた、システム面でも大きな進展がありました。

2012年１月には国立国会図書館内外の資料を統合的に検索できる国立国会図書館サーチが本格稼働し、児童書についても、従来の総合目録参加館所蔵資料に加え、広く公立図書館の所蔵資料も総合的に検索できるようになりました。

国際子ども図書館ホームページも、見やすい画面構成と情報発信の強化を追求し、2011年４月に全面改訂しました。国立国会図書館キッズページと併せて、新規コンテンツや検索ツールを搭載して、内容面の充実に常に留意しています。

今年度も展示会や各種講演会など、様々な企画を催すほか、ホームページを通じた情報発信や、遠隔地へのサービスを行ってまいります。どうぞ、国際子ども図書館を様々なかたちでご利用くださいますとともに、上野の山まで是非、足をお運びください。

2012年９月　　国立国会図書館国際子ども図書館長　坂田　和光

国際子ども図書館の窓　第12号
＜目次＞

【口　絵】

【はじめに】　＝坂田　和光　1

【調査・研究報告】

震災と子ども読書・学校図書館支援　＝河西　由美子　3
アイルランド児童文学のいま：民族の「記憶」を子どもたちに伝えるために　＝森野　聡子　8
ラトビアの児童書事情　＝黒沢　歩　18
インドネシアの児童書事情：現状と歴史的背景　＝シルヴィア・チョクロワティ・ミヒラ　29
2011年度児童サービス協力フォーラム～公共図書館による学校・学校図書館に対する学習支援～　＝児童サービス課　39
「日本の子どもの文学――国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」展を企画して　＝宮川　健郎　42
小さな“コレクション展示”の試み―「ヴィクトリア朝の子どもの本：イングラムコレクション」を開催して―　＝藤本　和彦　47

【コラム】

東日本大震災と国際子ども図書館　＝飛田　由美　52

【国際交流】

カリブの島で国際交流！第77回国際図書館連盟（IFLA）年次大会参加報告　＝小林　直子　54
講演会「占領期の児童図書：プランゲ文庫児童書コレクション」　＝企画協力課協力係　57
外国からのおもな来訪者　＝企画協力課協力係　60

【コラム】

児童雑誌がデジタル化されるまで　＝伊藤　裕子　61

【2011年１月から2012年３月までのできごと】　63

【活動報告】　65

【数字で見る！国際子ども図書館】　83

【国際子ども図書館利用案内】　89

震災と子ども読書・学校図書館支援

河西由美子

支援サイトをたちあげるまで

2011年３月11日を境に世界は大きく変わってしまった。東北地方を襲った激震と津波の影響は、いまや東日本や日本に留まらず、地球規模で暮らしや生き方を見つめ直し、政治的な転換を迫るところにまで及んでいる。一方で、震災から１年３か月が経った現在もまだ手つかずの問題が山積しているのも、グローバル化と並行する厳しい現実である。大局に立ってものを見ることと、目の前の日々を生きることの間で、かつてない混乱にさらされているのが被災地と被災地を取り巻く現在の私たちの姿だと言える。

震災当日、学会の編集会議のため、東京の本の街・神田神保町にいた私は、都内の多くの通勤者と同様に帰宅難民となり、翌日６時間かけて千葉県内に独居している母の元へ辿り着いた。職場の同僚からのメールで、東京郊外の勤務先の私の研究室は、壁に固定してあった４連の書架がすべて倒壊し、扉も開かない状況であることがわかった。大学校舎は安全確認のため立ち入り禁止となり、政府の通勤自粛勧告や計画停電などの影響で出勤できない日々が続いた。偶然持参していたノート PC は、地震直後から PHS 経由でインターネットに接続できたため、震災から３日後の３月14日に「被災地の子どもたちに届けたい本@ウィキ」をインターネット上に開設した。次々に明らかになる被災地の惨状に居ても立ってもいられず、そのときの自分の手の届く方法で、不特定多数の人に向けて呼びかけることにしたのである。

「ウィキ」というのは、インターネット上に情報を掲載するホームページの一種（ネット上の百科事典『ウィキペディア』と同じ発想・システムである）で、無料で制作でき、そこを訪れる誰でも書き込みや共同作業ができることが最大の特徴である。ウィキサイトでは「被災地の子どもたちに届けたい本」と

して、「自分だったらこの本を、被災した子どもたちと読みたい・届けたい」と思う１冊を、ネットを通じてサイトを訪れた方々に登録してもらうことにした。当時筆者が主宰していた SLLS（School Library as Learning Space：学びの場としての学校図書館）研究会有志の協力も支えとなってくれた。

「被災地の子どもたちに届けたい本」ブックリスト

ブックリストには、同じようにネットを通じて子どもたちに出来る支援を考えていたさまざまな方々からの推薦図書が続々と書き込まれた。日本国内だけではなく、米国在住の日本人のママさんたちからも書き込みが寄せられ、ネットの威力を実感した。推薦にはさまざまな視点があったが、最終的に、「安らぎを求めて」、「楽しく元気に」、「乗り越えるために」という３種類のカテゴリに分類した。特に３つ目の「乗り越えるために」には、あえて地震や津波に触れている本を含めた。そのためリストの冒頭には「このリストを活用される方への注意」として、「BL3（乗り越えるために）のリストには、地震に直接触れている本が含まれています。被災した子どもたちに提示する際には、必ず身近な大人の判断と配慮に基づいて提示してください」という注意書きを添えた。（筆者注：ブックリスト全文はインターネットからダウンロード可能である。関心のある方は文末のアドレスを御参照されたい。）

４月以降は、ブックリストに掲載された図書を、ウィキ上で募った募金で購入し、被災地の学校に送る作業が始まった。寄贈先の学校には、前もってリストを提示して、寄贈図書の内容について、身近な大人に確認してもらうこととした。実際に寄贈先の一つの学校の校長先生からは「うちの学校には、まだ津波で行方不明の家族がいる児童がいるので、一部の本は子どもたちには見せられない」と言われたこともあった。

2011年秋に、宮城県名取市の図書館祭りに参加させていただくことができ、ブックリスト掲載の図書を展示・寄贈させていただく機会を得たが、「乗り越えるために」のジャンルの本を手に取ったのは、全員が子どもたちであったことは、非常に印象に残っている。大人は一人も手に取らない本を、子どもたち

はとても自然に、しげしげと手に取って眺めていた。おそらくそのような事柄を大人に聞けば、大人が心配したり悲しんだりすることを子どもたちは感覚的に知っているのだと思う。しかし一方で、自分たちの身に起こったこと、これから生きていくために知っておくべきことについて、素朴な疑問や関心を、子どもたちが胸に秘めていることを確信した瞬間であった。心の傷に触れる本を押しつけ、苦しみを増幅させることがあってはならないが、必要なときに必要な本を、手の届く距離に置いてあげたい、とあらためて強く感じた。幸い、本は腐らない。今開くことはなくとも、本は読者を待ってくれる。

災害時の学校図書館の問題

私は新潟中越地震の際に、慶應義塾普通部司書教諭の庭井史絵さんが率いた学校図書館支援活動に参加させていただいた経験がある。そのときに痛感したことは、学校図書館という社会的認知度の低い施設が災害に見舞われたとき、復旧・復興への手立てを見つけることが非常に難しいということだった。当時既存の図書館団体が被災地の学校図書館支援に動かないことにも憤りと失望を感じ、それが今回のウィキ開設の強い動機にもなっている。

今回の大震災では、図書館・美術館・博物館等の社会教育機関が相互に連動した支援・復興活動も活発に展開されたが、図書館といっても、学校図書館は、公共図書館や大学図書館とは異なり、学校行政の中に組み入れられるため、往々にして図書館の枠組みから外されてしまう。かといって学校行政の枠組みにおいても学校図書館の存在は中核的とは言えず優先順位は極めて低い。

実際に、震災から１年後の2012年３月に国立国会図書館が刊行した『東日本大震災と図書館』（国立国会図書館関西館、2012）という報告書には、学校図書館の事例は含まれていない。筆者は３月29日に開催された同報告書の報告会に出席する機会を得たが、報告書の作成に関与した複数の発表者から「学校図書館の情報が取れない」という発言があった。学校に対して調査依頼をかけると、「図書館よりももっと重要性の高いことがあるのでは？」という反応が返ってきたという。この反応は、災害に及んで学校図書館が置かれがちな「学校か

らも図書館からも取り残される」危険性が杞憂ではないことを示している。

震災から１年余りでは、子どもたちの健康や生活といった基本的な課題が最優先であることも理解した上で、心のケアや科学的関心に基づいた復興への意識を養うという意味において、子どもの読書を支える学校図書館の復旧・復興の重要性についてこれからも声を上げていきたいと思っている。

学校図書館被災調査を行って

学校図書館の復興は、本来的には学校の復興計画の中に位置づけられ、公的な予算配分の中で行われるべきものだが、日本の大半の学校図書館には、その業務を責任もって担当できる「人」がいない。全国約40,000校の小・中・高校の半数には、学校図書館法で定められた「司書教諭」という専門教員は配置されていない。現場の状況やニーズを把握し、学校経営の中に提案していく立場の人がそもそも存在しないのである。専門家がいない学校図書館では、支援を求める声すら上げられないのではないかと危惧している。

筆者は、2011年度日本図書館情報学会の震災特別助成を受け、被災地の学校図書館を調査する機会を得た。当初は、2011年７月までに、前述のウィキを通して図書寄贈が実現した福島県・宮城県の学校へ追跡調査を実施することを予定していたが、福島県は2011年３月に予定していた県の人事異動が同年の８月に遅れて実施され、さらには町ぐるみで避難していた地域の小学校が、さらに別の自治体に避難をするといった事態が重なり、寄贈先への追跡調査は事実上困難となった。最終的に、寄贈先の一つである宮城県岩沼市の学校司書の方が、隣接する名取市図書館をご紹介くださった。名取市は従来から全小中学校に学校司書が配置されており、学校司書の方々を通して詳しい被害状況のアンケートやインタビューを実施することができた。その結果は、2012年５月に日本図書館情報学会春季研究集会（会場：三重大学）にて発表を行った。一地域でも調査が実現したことについては、名取市をはじめとする関係各位のご厚意によるところが大きく、感謝の念にたえない。一方で、私の心の中には、「人のいない学校図書館」を危惧しているのに、人のいる学校図書館しか調査できなかっ

たという忸怩(じくじ)たる思いも残った。

災害時の子ども読書支援の課題

震災後の子ども読書支援の課題として、今回の調査や見聞から浮かび上がってきたのは、個人による本の寄贈がもたらした問題である。専門の団体などが支援を組織化する以前に、個人の善意で送られた図書のうち、子どもにはおよそふさわしくない本や、廃棄に相当するような古書が相当数含まれていた。筆者が調査を行ったある学校では、いまだに300箱を超える図書が使いみちなくそのまま保存されているという話を聞いた。新刊本の寄贈の場合でも、同じタイトルの本が何十冊も一つの箱に詰められた状態では、結局人手がなく活用できなかったという話も聞いた。

今回、震災後に多くの人が「子どもの心のケアのために本を送りたい」と考えたことは素晴らしいことである。子ども読書の重要性が社会の共通認識として存在していることの表れであると思うからだ。

一方で、子どもに本を届けるためには、それなりの専門知識や専門家の力が必要だということが理解されていなかったのは残念であり、それは筆者も含めて、子ども読書や図書館に関わる専門家や既存組織が、それだけの社会認知や信頼を得ていなかったということを示しているのではないか。災害大国日本でこの先再び困難な事態が生じたとき、子どもを思うより多くの善意が実を結ぶように、震災時の本や読書を通じた子ども支援について、平時より専門の団体・関係者が連携して協議し、交流するネットワークづくりが求められていると考える。その中で、置き去りにされがちな学校図書館の問題も取り上げることができればと願うものである。

被災地の子どもたちに届けたい本@ウィキ　http://www45.atwiki.jp/slls

（かさい　ゆみこ　玉川大学准教授）

アイルランド児童文学のいま：民族の「記憶」を子どもたちに伝えるために

森野　聡子

はじめに

「記憶」は、アイルランド社会を語る上で重要なキーワードの一つである。

アイルランドことエーレは、12世紀以来、隣国イングランドによる干渉を受け、1801年には「併合」の名の下に植民地化され、20世紀に入りようやく独立を果たしたという歴史を持つ。その間、アイルランド固有の言語（ゲール語）や伝統・習俗、カトリック信仰が抑圧されただけではない。住民の多くはジャガイモ飢饉（1845～52）による飢餓・貧窮・立ち退き、そしてアメリカやオーストラリアなどへの出稼ぎ・移民による家族離散を経験、さらには連合王国からの分離をめざす抗争や内戦からも多大な犠牲をこうむった。このような過去の「記憶」が、現在でもアイルランドの民族的アイデンティティの根幹に存在する。

たとえば、「我らは兵士、アイルランドのために命を捧げ、砲弾の中、兵士の歌を唱和せん」と歌う国歌は、1916年の復活祭蜂起の際に連合王国からの独立を求めるアイルランド義勇軍が用いた革命歌、いわばアイルランド版「ラ・マルセイエーズ」である。また、ラグビーやフットボールの国際試合の際、国歌の代わりに歌われる「アセンライの畑」（The Fields of Athenry）は、アイルランドの人口の４分の１が餓死や移民により減少したと言われるジャガイモ飢饉の時代、家族のために食べ物を盗んでオーストラリアに流刑にされる若者の苦難を語るバラッドである。さらに、2006年度カンヌ国際映画祭でパルム・ドールに輝いた『麦の穂をゆらす風』（*The Wind That Shakes the Barley*）やロック・グループ U2 の「血の日曜日」（Sunday Bloody Sunday, 1983）などには、独立の過程において南北が分断され、親子・隣人が殺し合う内戦、そして北アイルランド紛争に至った、民族的トラウマが色濃く反映されている。

児童文学の場合はどうだろうか。本稿では、1991年度から2012年度までのCBI ビスト最優秀児童図書賞受賞および最終候補作を対象に、以上のような民族の「記憶」を現代アイルランド作家が次代を背負う子どもたちにどのように語り伝えているのかを見ていくことで、「ダレンシャン・シリーズ」や「アルテミスファウル」とは異なる、アイルランド児童文学のもう一つの顔を紹介したい。

CBI 最優秀児童図書賞（Duaiseanna Leabhair na Bliana CBI/The CBI Book of the Year Awards）

「アイルランド児童図書協会」（Children's Books in Ireland、以下 CBI と表記）が運営するアイルランドを代表する児童文学賞で、1990年の創設時にはスポンサーである食品会社ビストの名をとって「ビスト最優秀児童図書賞」として知られていたが、2012年度から現在の名称に変更された。本稿では、2011年度までの作品を含め、便宜上 CBI ビスト最優秀児童図書賞と表記する。

CBI は、教員や司書、研究者などからなる組織で、政府より資金援助を受け、アイルランド児童文学の振興のためのイベントや研究プロジェクト、ジャーナル Inis の刊行などを行っている。中でも最大の活動が、年間最優秀児童図書賞の選定である。

本賞は毎年３月に候補作（ショートリスト）が発表され、５月に受賞作品が公表される。選考対象は、アイルランドの市民権を有するか、アイルランドに居住する作家・イラストレーターによる子どもとヤング・アダルトを対象とした書籍（英語およびゲール語）である。賞部門は、CBI の公式サイト（http://www.childrensbooksireland.ie/the-cbi-awards/）によれば、2012年現在、以下のとおり。

① CBI 最優秀児童図書賞（The Book of the Year Award）
② エイリース・ディロン賞（The Eilís Dillon Award for a First Children's Book）：アイルランドの児童文学作家エイリース・ディロン（Eilís Dillon,

1920-94）にちなんで作られた賞で、児童文学の新人に贈られる

③　フィクション栄誉賞（The Honour Award for Fiction）

④　イラスト栄誉賞（The Honour Award for Illustration）

⑤　審査員特別賞（The Special Judges' Award）

⑥　子ども審査員賞（The Children's Choice Award）

※　Honour Awards は Merit Awards が2006年度より名称変更されたもの

※　子ども審査員賞は2010年度に設けられ、2012年度が２回目となる

アイルランド児童文学における「伝承」

19世紀末、アイルランド独立運動の文化的側面として起こった、いわゆる「ケルト復興」では、中世の修道院文化全盛期に筆記された古ゲール語説話とともに民話が「民族の記憶」として制度化され、W・B・イエイツらによる伝承の収集・再話が盛んに行われた。アイルランドといえば「妖精」というステレオタイプも、いわば、この時期の文化的ナショナリズムの所産であり、ひいては日本におけるアイルランド児童文学の翻訳紹介におけるファンタジー偏重の原因ともなっている。

実際には CBI ビスト最優秀児童図書賞の作品リストを見ると、アイルランド民話・伝説の子ども向け再話は、もはや児童書の主流ではない。現代アイルランドの代表的絵本作家 P・J・リンチ（P. J. Lynch）がイエイツの民話集に挿絵をつけ1991年度イラスト栄誉賞を受賞した『アイルランドの妖精物語』（*Fairy Tales of Ireland*, 1990）、2001年度の候補作に残った、マラキー・ドイル（Malachy Doyle）文、ニーアム・シャーキー（Niamh Sharkey）挿絵による『アイルランドの昔話』（*Tales from Old Ireland*, 2000）があるくらいだ。

一方、近年の傾向として注目したいのが、現在を語るための舞台として「伝承」を活用する作品の登場である。たとえば、2006年度 CBI ビスト最優秀児童図書賞および2005年度ウィットブレッド賞、ガーディアン賞児童文学部門受賞、そしてカーネギー賞にもノミネートされたケイト・トンプソン（Kate Thompson）の『時間のない国で』（*The New Policeman*, 2005）では、現

代アイルランドの村キンヴァラ（作者の居住地でもある）と常若の国ティル・ナ・ヌォーグをパラレル・ワールドに、時が存在しないはずの妖精国を人間界から流出した時間が侵食するという奇抜な設定で、IT バブルによって「時間」を失ってしまったアイルランドの「いま」を風刺する。また同じ作者による『夜生きるもの』（*Creature of the Night*, 2008）は、夜のダブリン市街を彷徨するティーンエイジャーと田舎の民家に隠れすむという「妖精の取替え子」を重ね合わせることで「居場所」を失った苦しみをつづった佳作として、2009年度フィクション栄誉賞に輝いた。なお、トンプソンはイングランドのヨークシャー出身（父親はマルキシスト歴史学者の E・P・トンプソン）で、1981年よりアイルランド西部に移住、2012年現在 CBI ビスト最優秀児童図書賞を 4 回受賞と、最多記録を誇る作家である。

飢饉から内戦までの「記憶」

時間的にも空間的にも現実と遠く隔たった「伝承」の世界とは異なり、併合され、抑圧されてきた祖国の歴史は、祖父母の思い出話、写真などの形で家族のレベルでも共有されている「集合的記憶」である。

中でも19世紀半ばの度重なる大飢饉は、ジャガイモを主食とするアイルランドの小作農から、生活の糧のみならず家・家族を奪う悲劇を引き起こした。マリータ・コンロン＝マッケンナ（Marita Conlon-McKenna）の「飢饉の子どもたち 3 部作」（Children of the Famine Trilogy）は、この時代を扱った児童書として有名だ。第 1 作の『サンザシの木の下に』（*Under the Hawthorn Tree*, 1990）は、生まれたばかりの幼い妹と両親を飢饉で失った 3 人きょうだいが、母の思い出話に出てきた見知らぬ大おばさんを頼ってアイルランドを旅する物語。知恵と強い意志を持って生き抜く子どもたちの姿は日本語を含め多くの言語に翻訳され、世界的ベストセラーになった。続く『ワイルドフラワー・ガール』（*Wildflower Girl*, 1991）は、13歳に成長した末っ子のペギーが単身アメリカに渡り、メイドとして働きながら新天地を目指す新たなサバイバルの物語で、1992年度歴史小説部門栄誉賞に輝いた。

1998年度栄誉賞のサンヴェ・ラリー（Soinbhe Lally）作『飢餓の風』（*The Hungry Wind*, 1997）は救貧院の悲惨かつ屈辱的な生活を強いられた少女たちが、オーストラリアへ移民することで希望をつかむ物語である。

一方、復活祭蜂起から独立戦争、そして1921年の和平協定による南北分断によって起こった内戦までの混乱期（1916～21）については、まずショワーン・パーキンソン（Siobhán Parkinson）のベストセラー『アメリア』（*Amelia*, 1993）を挙げたい。1914年のダブリンを舞台に、裕福な貿易商でクエーカー教徒ピム家の波乱万丈のドラマを描いた作品だ。13歳の少女アメリア・ピムが、父親の破産や、女性参政権運動のデモに参加した母親の逮捕という非常事態の中、家族を救うためにメイドのメアリ・アンと立ち上がり、世間知らずのお嬢様から、たくましく成長していく。続編『アメリアに平安はない』（*No Peace for Amelia*, 1994）では、時は移り1916年。ヨーロッパ大陸では第一次世界大戦の嵐が吹き荒れる中、アメリアのボーイフレンド、フレデリックがクエーカー教徒の平和主義に反して戦争に志願してしまう。一方メアリ・アンの兄も復活祭蜂起にかかわることになり、２人の少女が再び協力して困難に立ち向かう。パーキンソンは、2010年に設定された、児童文学で大きな功績を残した作家に与えられる「若者ローリエト（Laureate na nÓg）の初代受賞者に選ばれた。

対して、1997年度エイリース・ディロン賞および栄誉賞を受けたジェラルド・ウィーラン（Gerard Whelan）の『復活祭の銃』（*The Guns of Easter*, 1996）は、飢えた家族に食べ物を持ってくるため銃弾飛び交うダブリンの市街を突破しようとするジミーの壮絶な体験を語る。続編『スパイたちの冬』（*A Winter of Spies*, 1998）では、ジミーの妹セアラを中心に、独立派・政府双方のスパイ活動に巻き込まれる家族の姿を追う。両作品とも、政治やイデオロギーとは無縁の子どもの眼に映った一連の争乱をリアルに描くことで、戦争や革命は決してヒロイックなものではなく、あるのは流血と不条理な死だけであることを強く訴えかける点で、独立戦争期を子どもたちの視点から描いて、2003年度栄誉賞を受賞した短編集『戦争の子どもたち』（*War Children*, 2002）とも共通する。

飢饉や内戦を扱ったこれらの作品には共通した語り口がある。飢餓や死や戦

争といった悲惨な現実に翻弄される子どもたちの姿は痛ましい。しかし、だからこそ、苦難を乗り越えて生き残っていく強さが強調される。「それがきみたちにとっての歴史なのだ。」とウィーランが『スパイたちの冬』の結びで言うように、「過去」はいかに過酷であろうと、新しい世代はそこからさまざまなことを学んで生き続けていく。

北アイルランド紛争の「記憶」

ウィーランら1950年代生まれの作家が、百年以上前に起こった大飢饉や内戦を「遠い過去の記憶」として教訓をこめて語ることが可能なのに対し、北アイルランド紛争は40年来の「現実」である。北アイルランドでは、共和国との合体をめざすカトリック系住民と連合王国への帰属を望むプロテスタント系住民双方の武力組織のテロが激化、また連合王国政府の干渉も流血を生んだ。1972年１月には、政府軍が公民権を要求するカトリック系市民のデモ隊を狙撃するという「血の日曜日事件」がデリーで起きる。また、1980年から81年にかけては、独立派の囚人が「政治犯」としての認知を求めてハンガー・ストライキを行い死者が出た。1980年代は、サッチャー政権に抗議した爆弾テロがニュースをにぎわした。アルスター大学の調査によれば、紛争による死者は1969年から2001年の間で3,500名余りに及ぶという。

“The Troubles”と呼ばれる紛争が児童文学で取り上げられるのは、CBI ビストのリストを見る限り1999年以降だ。紛争の「トラウマ」が児童文学に再現される転機となったと思われるのが、1998年４月10日の「聖金曜日合意」(Good Friday Agreement)である。ブレアの労働党政権の地方自治政策とアメリカの調停により、長らく待ち望まれていたテロ組織の武装解除と停戦がようやく実現する。その後、IT 立国として「ケルティック・タイガー」の異名をとるほどの好景気に見舞われたことも、紛争と向き合う強さを作家に与えたと思われる。

2009年度最優秀児童図書賞およびカーネギー賞を受賞したショワーン・ダウド（Siobhán Dowd, 1960-2007）の『ボグ・チャイルド』（*Bog Child*, 2008）は、紛争当時の北アイルランドを舞台に、ハンガー・ストライキを行っている

兄を助けるために IRA に協力を求められた少年と、少年が国境の泥炭地帯から発見した少女のミイラをめぐる物語である。人身供犠にされた少女の「記憶」が少年の夢に蘇り、1981年の北アイルランドの「いま」と鉄器時代の「過去」がパラレル・ワールドとして交錯し、「大義」のために自己を犠牲にすることの意味を少年、そして読者に問いかける。

このようなすぐれた作品が生まれているとはいえ、児童文学において紛争を直接扱うのはいまだ難しい。いくら停戦合意が成立しても、昨日まで戦ってきた住民同士の傷跡がそう簡単に癒えるわけではないからだ。2000年度栄誉賞を受けたマーク・オサリヴァン（Mark O'Sullivan）の『沈黙の石』（*Silent Stones*, 1999）の主人公で、IRA のテロリストを父に持つロビーにしろ、ケイト・マクラクラン（Kate MacLachlan）の『我が敵を愛せ』（*Love My Enemy*, 2004）の主人公で、聖金曜日合意後にカトリック住民に殺されたベルファストの警官を父に持つ少女ジーにしろ、親の世代の争いや憎悪を子どもたちが引き受け、乗り越えていくために払う代償はあまりに大きい。

こうした事情からだろう、舞台を外国や過去に設定することで、北アイルランド紛争の根底にある宗教的・民族的不寛容を子どもの視点から語る作品が多いのが特徴的である。代表作が2007年度最優秀児童図書賞を受賞し、映画化もされたジョン・ボイン（John Boyne）の『縞模様のパジャマの少年』（*The Boy in the Striped Pyjamas*, 2006）である。ナチスのユダヤ人迫害を扱ってはいるが、ナチス、アウシュヴィッツ、ヒトラーといった「大人」は知っている名称を一切使わずに、ナチス将校の息子と収容所の少年の交流を子どもの眼から描くことで、宗教や民族の違いが引き起こす「大人」の世界の対立を、北アイルランド紛争にも共通する普遍的なテーマとして提示することに成功している。

同様の作品としてオーブリー・フレッグ（Aubrey Flegg, 1938-）の「ルイーズ３部作」がある。2004年度最優秀児童図書賞に輝いた第１作目の『デルフトにかかる翼』（*Wings Over Delft*, 2003）は、1654年に起こったデルフトの武器庫大爆発事件を背景に、宗教対立に巻き込まれる、プロテスタントの裕福な商人の娘ルイーズとカトリックの画家見習いピーターの淡い恋を描く。デルフ

トが、17世紀にアイルランドのカトリック教徒を弾圧した、オランダ出身のイングランド王ウィリアム３世の家系オラニエ公ゆかりの地であることを思うと、フレッグが本作にアイルランドの状況を重ね合わせているのは明らかだ。ボインの作品同様に、二人は闘争で命を落とすが、続く２編において、ルイーズの肖像画は人の手から手へと伝えられ、時と空間を超えて蘇りながら、フランス革命、そしてアウシュヴィッツと、時代時代のヨーロッパの動乱を目撃する。

2000年度最優秀児童図書賞のマリリン・テイラー（Marilyn Taylor）作『はるかなる故郷』（*Faraway Home*, 1999）は、ナチスによる迫害を逃れて、北アイルランドに疎開してきたユダヤ系オーストリア難民のきょうだい、現地のプロテスタントの少年たち、ダブリンから難民支援に借り出されたユダヤ系の少女らが、1941年のドイツ空軍によるベルファスト大空襲のさなか、宗教や民族的差異を超えて絆を深めていく物語である。

オシーン・マクガン（Oisín McGann）の『神々と機械』（*The Gods and Their Machines*, 2004）は、富とテクノロジーを誇る大国アルティマと前産業社会的様相が残るバートクリンという架空の国が舞台である。バートクリン人による自爆テロでクラスメートを殺されてしまったアルティマのパイロット訓練生ハマスと、女性に対する戒律の厳しいバートクリンの日常を逃れゲリラ組織に加る少女リアドニ。この二人の出会いを通じて、アイルランドや中東にも共通する紛争やテロの問題に焦点を当て、2005年度栄誉賞を受賞した。

一方、ジェイン・ミッチェル（Jane Mitchell）の『チョークライン』（*Chalkline*, 2009）は、カシミール紛争を取り扱う。９歳の少年ラフィクが家族とともに静かに暮らす村に、ある日、カシミール解放戦線の兵士たちがやって来る。彼らは教室の黒板にチョークで線を引き、背の高さがこの線を越えた少年は新兵として連れて行くという。年齢の割に長身のラフィクは解放戦線のキャンプで兵士としての訓練を受けることになり、次第に人間性を喪失していく。カシミールは、インド独立以来、インド、パキスタン、中国が領有を主張して何度も戦争の舞台となったほか、1990年代からはイスラム過激派によるテロが激化している点、北アイルランド紛争と似た構図を持つ紛争地域である。武装ゲリラや

テロリストと普通の住民を分けるのはチョークの一筋に過ぎないとして、戦争の非人間性を真摯に描き出し、2010年度に20周年を記念して特設された子ども審査員賞に輝いた。

「歴史」が起こったことを記録するものであるとするならば、「文学」は起こったかもしれないことも語りうる。21世紀を迎え、アイルランドの児童文学は、このような語り口を見つけることで、紛争という余りにも生々しい「現実」をただ再現するだけでなく、未来をになう子どもたちに向かって再生と和解への希望を語るという、児童文学としての大切な使命を担い始めたのである。

ゲール語の児童書出版の現状

最後に、アイルランドの第一公用語であるゲール語の児童書について紹介する。ゲール語出版社は、1945年に創立された「アン・グーム」(An Gúm) が政府の支援を受けて存続しているが、1980年代半ばから「ゲールタハト」と呼ばれる西部のゲール語地域を中心に独立出版社が次々誕生、各出版社はそれぞれ自前のウェブサイトを持ち、直接書籍を販売している。1990年代以降のインターネットの普及が、これら地方の小さな出版社の活動を支えているのである。

このように一見、充実してきたかに見えるゲール語児童書であるが、問題も多い。大半が初学者用の絵本や副読本的書籍で、それに続く図書が乏しい点だ。ゲール語が学校の必修科目であることから、学習用の出版物は隆盛である。けれども、ゲールタハトを除けば、ほとんどの子どもは学校以外でゲール語を使うことがない。したがって、せっかくゲール語が読めるようになっても、年長になれば英語の本に移ってしまう。実際、アイルランドの書店の児童書売り場で人気を誇るのは「ハリー・ポッター」など、英語で書かれた国際的ベストセラーである。日常的な読書習慣につなげるためにも、ゲール語でしかできない表現と内容を備えた良質な児童文学が求められている。

そんな中、注目したいのが、ゲールタハトのキルケニーに拠点を置くアニメ・イラストスタジオ、カトゥーン・サルーン（The Cartoon Saloon）による、ゲール語のグラフィック・ノベル出版である。素材はアイルランドの伝承物語

で、コミック・スタイルのレイアウトや文体は読みやすく、フルカラーのイラストは子どもも大人も惹きつけるクォリティを持っている。1999年の設立以来、聖パトリックの若き日を扱った『奴隷』(*An Sclábhaí*, 2001)、『ディアルミドとグラーネの追跡』(*An Tóraíocht,* 2002) と、手がけた作品が立て続けに栄誉賞に輝いた。古代アイルランドの有名な叙事詩を再話した『クアルンゲの牛捕り』(*An Táin*, 2006) は CBI ビストでは最終候補にとどまったが、2006年度ゲール語ヤング書籍賞 (Oireachtas na Gaeilge/Irish Language Book of the Year award for Young People) を受賞している。最近では、アイルランドの国宝である装飾写本『ケルズの書』をめぐる物語を描いた『ケルズの書の秘密』(*The Secrets of Kells*, 2009) のアニメーション版が2009年度アカデミー賞長編アニメーション映画部門にノミネートされ、話題を呼んだ。

北アイルランドに目を移すと、2005年に創設されたベルファストの出版社「アン・ツナーイド・ウォール」(An tSnàthaid Mhór/The Dragonfly Press) が精力的な活動を行っている。会社を統括するアンドリュー・ウィットソン (Andrew Whitson) のイラストにカトリーナ・ヘイスティングズ (Catríona Hastings) が文をつけたゲール語の物語絵本は、『緑のベルトの戦士』(*Gaiscíoch na Beilte Uaine*, 2007)、『妖精と靴屋』(*An Greasaí Bróg agus na Síoga*, 2008) と相次いで最優秀児童図書賞の候補となり、『アイルランド王の息子』(*Mac Rí Eireann*, 2010) でついに2011年度イラスト栄誉賞を獲得した。コンビによる最新作の『木から木へ』(*Ó Chrann Go Crann*, 2011) も2012年度の最終選考に残るなど躍進が続いている。さらに、ゲール語と英語の字幕を選べる DVD を添付したり、iPad や iPhone 用に電子書籍化するなど、同社が行っているマルチメディア出版への取り組みは、少数言語による児童図書出版の今後のあり方を示すものとして興味深い。

ゲール語という、かつての民族のことばが、北と南を政治的、宗教的に分断する国境を超えて、アイルランドの「記憶」を結ぶ日が来ることを願いたい。

(もりの　さとこ　静岡大学情報学部教授)

ラトビアの児童書事情

黒沢　歩

1．民族の英雄ラチプレシス

「……そこにバルト海の潮の香がただよい、大いなるダウガワの川霧がけむっています。これはラトヴィアという東ヨーロッパの国の古い伝説をもとにした物語です。……」

ロシア語翻訳家の袋一平（1897-1971）が1953年に日本に邦訳して紹介したラトビアの文学作品『勇士ラチプレシス』（講談社世界名作全集）を読むと、選ばれた言葉の端々に未知の民族への敬意が満ちあふれ、出版当時の日本にあったであろう息吹を新鮮にさえ感じられる。物語は、森と湖に囲まれた自然豊かな地で美しい女神に守られて幸せに暮らすラトビアの民族が、他民族の侵略にさらされるところ、勇士ラチプレシスが迫りくる敵に勇敢に立ち向かうが、事実、この小さな民族がそれから忍ばねばならなかった困難を暗示して終わる。勧善懲悪に慣れ親しんだ日本の子どもの読者の心に、ふしぎな余韻を残したことであろう。文を飾る挿絵も、異国情緒に彩りを与えている。

講談社世界名作全集
『勇士ラチプレシス』表紙
（有岡一郎　絵）

袋一平による邦訳は、日本の読者にわかりやすいように随所に解説が加えられた子ども向けの読み物であるが、原作は児童書の枠に留まらず、その後のラトビア文化に多大な影響を与えてきた。著者アンドレイス・プンプル（正確な読み方はプンプルス、1841-1902）が「他民族にある英雄伝がラトビア民族にもあっていいはずだ」と奮起して、15年の歳月をかけて練り、1888年に開催された第三回合唱祭に上梓した原題ラーチプレー

シス（*Lāčplēsis*）は、ラトビア民族の神によって選ばれたひとりの英雄の名である。ラトビアのフォークロアと神話を題材に12世紀にはじまるドイツ人支配の史実が重ねられ、19世紀後半に高まりをみせたラトビア民族の自我を鼓舞し、国家独立の思想が巧みに反映された民族ロマン主義の代表作とされる叙情詩である。原作はソ連時代に部分的な削除を受けながら再版は17回を数え、ロマン主義絵画の題材となり、ソ連時代の終焉期にはロックオペラとして舞台化され、世界各国語に広く翻訳されている。

このほかに邦訳のあるラトビアの児童書は、民話の再話『ひつじかいとウサギ』(1977) のみであるが、いずれもロシア語からの重訳である。ちなみに、ラトビア語に訳された日本の児童書には、日本昔話集『魔法のキモノ』(*Burvju Kimono*, 1994)、子ども向け俳句集『水に映る月、水に映る星』(*Ūdenī mēness, ūdenī zvaigznes*, 1995)、宮沢賢治の童話集『銀河鉄道の夜』(*Piena ceļa vilciena nakts*, 1998)、村上春樹の『羊男のクリスマス』(*Aituvīra Ziemassvētki*, 2006) がある。

2．言語をめぐる環境

ここで取り扱う児童書は、国語のラトビア語で出版された作品を対象とするが、実際に現地の本屋を眺めてみれば書架はラトビア語とロシア語とに分類されていて、その割合はほぼ6対4となる。その背景には、総人口約220万人のうちの民族比率に占めるラトビア人が6割程度にすぎない特異な民族構成がある。残りの4割近くをロシア人を首位とするロシア語系住民が占めているため、北海道ほどの国土面積のラトビアの言語環境は、世代間の差はあるとはいえ、ほぼバイリンガルにあると言える。

ラトビア語とは、リトアニア語と古プロシア語(後者はすでに死語となって久しい)とともに印欧語族においてバルト語派の一枝を担う言語である。歴史を振り返ってみれば、13世紀以降、ラトビア民族はポーランド、スウェーデン、ロシアと度重なる支配下にあった。そのため、ラトビア語は民謡と民話の口承によって継承されてきた。その文字化は、ドイツ人入植者によるこの地域のキリスト教化を図らんとして推進された聖書の翻訳に

よってはじまっている。

ラトビアに生まれたドイツ人の宣教師であり、啓蒙主義の作家であったゴットハルド・フリードリッヒ・ステンデル（1714-96）による『絵によるABC』（*Bildu ābice*, 1787）は、ラトビア語のアルファベット教材であると同時に、キリスト教の布教の意図が色濃い。この書は現在まで再版がつづき、ドイツ語に強く影響を受けた古い表記がために、現在もラトビア文学を専攻する学生たちは、まずこの書でラトビア文学の古典を読解するコツを学んでいる。

19世紀後半に、ラトビア人の間にもペテルブルグの大学にて教養を身につけた知識層が形成され、民族意識に芽生えた彼らが中心となって「新しいラトビア人運動」に発展した。この運動の基盤となったのが、ラトビア語の地位の確立である。ラトビア語を讃えて、「母語は我が民族の至宝である」（言語学者ヤーニス・エンゼリーンス）、「我が言語は微に入り細に入り、深みと豊かさに事欠かない」（言語学者アティス・クロンヴァルズ）、「ラトビア語を知ったならば、もう自分の貧しさを訴える必要はない」（劇作家ユリス・アルナーンス）等の言葉が残されている。

3．民謡と民話の収集

ラトビア民族の精神文化のルーツは、しばしば民謡にたどられる。主に四行詩の一定の韻律をとる民謡は、人の誕生から死、農作業、冠婚葬祭等、暮らしのあらゆる事象と喜怒哀楽を歌いあげ、民族の自然信仰と道徳観、そして美意識の大系を成している。クリシュヤーニス・バロンス（1835-1923）は、各地から収集された民謡の手書きカード26万枚以上を1,400区分の箱に分類し、ラトビア民謡『ダイナス』（*Latvju Dainas*）（全６巻、1894-1915）を編纂出版したことで、ダイナスの父と称される。分類箱は「ダイナスの棚」と呼ばれ、2001年に民族合唱祭とともにユネスコの世界遺産に登録された。データベース化された「ダイナスの棚」の引き出しは、ネット上で閲覧が可能である。（www.dainuskapis.lv）

民謡は、いまもラトビア人の暮しに根付いており、たとえば、誕生日の

際に歌い上げられたり、年中行事の祝いの文句として、カードに書かれて送られたりする。その一例を添えておく。

歌いながらでかけましょう
ひとのうわさ話はしないで
歌えば嬉しくなるけど
話すと哀しくなるわ（筆者訳）

ダイナスという遺産ゆえに、ラトビア人にとって「歌うことは生きること」に等しいとさえ言えよう。ラトビア政府が「歌う民の国」として世界にその存在を発信しているように、現存するラトビア人の数より多いと誇張される豊かな民謡の宝庫は、文学を形成する言葉の礎となっている。

他方、ダイナスの収集と同時期に、ラトビアの民話も熱心に収集されていた。

『ラトビア民族の昔話と民話』（*Latviešu tautas pasakas un teikas*, 全７巻、1891-1903）には、民話1,900と昔話3,300が収められている。これらを収集編纂した作家レーリフス・プシュカイティス（1859-1903）が教員をしていた学校の旧校舎は、いまでは民話博物館となっている。

「むかしむかし、海（または山）の向こうのはるか遠くで…」とはじまるラトビア民話の典型的なストーリーは、悪者退治の物語で、竜の九つの頭を切り落とし敵を地中に埋めて成敗し、ガラスの山の頂上に達し、謎解きをし、良い行いの末にハッピーエンドとなる。いずれの行為も三度試して成功する。

４．ラトビアの童話

時を同じくして、ラトビア語の童話が確立された。詩人で評論家でもあったカーリス・スカルベ（1879-1945）は、独特の余韻にあふれる繊細な童話の世界を展開した。ラトビア民話をモチーフとしながら悪者退治のハッピーエンドに終わらせないスカルベのさまざまな童話作品の題材には、20

世紀初頭に起きたロシア革命前夜の世相を反映し広い世界に自由を希求する作品もあるが、特に代表作とされるのは、トルストイの思想に通じる人道主義で貫かれた『猫の風車小屋』（*Kaķīša dzirnaviņas*）である。幸せはやって来たかと思ったときにはもう過ぎ去っている、ほのかに触れる香りでしかない―そうした幸せを童話のなかで追求したスカルベは、ラトビアのアンデルセンとも称され、“静けさの魔術師”と呼ばれる。スカルベの童話作品は随時再版されて現代まで読み継がれ、しばしばアニメ化され、2010年には読み上げの絵本が CD 版で新たに発売されている。

カーリス・スカルベの童話集
（Kārlis Skalbe, Pasakas, Zvaigzne ABC 版）

このように20世紀初期に言語と民謡と民話を支柱としたラトビア民族は、1918年に初めて共和国として独立を宣言した。その後のおよそ20年間に民族的な芸術と文化が繁栄したベルエポックを迎えたが、それも第二次世界大戦によって閉ざされる。1939年以降、ラトビア民族は、ソ連への併合、ナチスドイツによる占領、終戦によるソ連領化とめまぐるしく翻弄され、シベリアへの強制移住と国外亡命、ソ連圏からの労働者の移住政策により、その人口構成は大きく変化した。

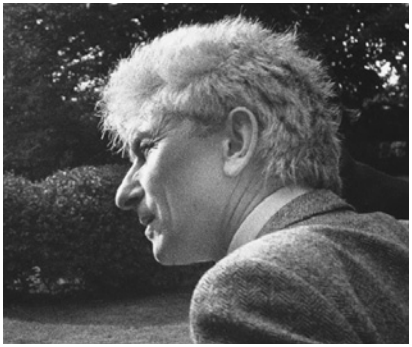
それから半世紀後、ラトビア、エストニア、リトアニアの人々は南北600キロメートルを手をつないで“人間の鎖”を結び、歌を口ずさみながら旧ソ連からの離脱の願いを示した。歌謡は、バルト三国の人々にとって単に歌う行為に留まらず、普段は声高に主張をしない意志を結集する能動的な機能を担ってきたといえる。

5．現代の作家たち

ヴィズマ・ベルシェヴィツァ（1931-2005）は、1969年に政治体制への

抵抗の意志に満ちた力強い詩集を出版したことにより、ソビエト政権に7年間も発表を禁止され、著作は図書館から撤去された。そのことこそが、ラトビア人としての英雄の証であったとも言える。「クマのプーさん」や「ドリトル先生」をラトビア語に翻訳したほか、子ども向け戯曲や童話を書きつづけた。特にその詩人としてノーベル文学賞にノミネートされたことは一度ではないが、自伝的三部作『ビッレ』（*Bille*, 1996, 1997, 1999）はスウェーデン語に翻訳され、トランストロメルが1997年に創設したトランストロンメル文学賞を受賞した。

2011年が二度目の参加となるボローニャ国際絵本原画展にて、ラトビアは国内及びバルト三国で各種受賞作品を展示したほか、二人の作家に焦点を当てた。そのうちのひとりイマンツ・ジィエドァニス（1933-）は、ソ連時代から一貫して民族愛を独自の表現形態で突きつけてきた作家であり、リンドグレーン文学賞にラトビアが推薦した現代ラトビアの知識層の頂点に立つ存在である。『いろとりどりのお話』（*Krāsainas pasakas*, 1973）は、奇想天外な発想と絶妙に織りなされる言葉の感覚を楽しんだ子どもが、大人になって再読しても常に新たな気づきをもたらしてくれる含蓄に富む作品である。数多くの再版を重ね、近年国内外で評価の高いヴァルミエラ劇場で舞台化されたこともあり、いまもって色褪せることがない。ラトビア文化省の委託で2006年に作成された「黄金のラトビア文学百選」に含まれた数少ない児童書のうちの一冊に選ばれており、2008年には仏語訳付きで再版されている。



イマンツ・ジィエドァニス
（写真 Vilnis Auzins）

他方で、小説家ユリス・ズヴィルグズディンシュ（1941-）は、近年、作家の胸ポケットに住んでいる熊のぬいぐるみトビアスの冒険シリーズ絵

本で子どもたちの人気を一躍に博し、国内児童文学賞を多数受賞している。また、アルファベット教材風の絵本も作成するなど、幼児向けの作品が少なくない。

6．児童文学賞・絵本原画賞

児童書及び絵本原画を対象とする主な賞を紹介しながら、近年注目される受賞作と作家を挙げてみよう。

① 1995年にはじまった児童文学賞を改名した**バルトヴィルクス賞**は、ラトビア青少年文学委員会が主催する、ラトビア語の児童書の向上と読書を促進させる「本を読む白い狼」プロジェクトの一環である。イメージキャラクターである「白い狼」とは、詩人バルトヴィルクス（1944-2003）（Balts＝白、vilks＝狼）にちなみ、例年の授賞式は詩人の誕生日の７月24日に開催される。2008年以降はラトビアの作家と絵本画家以外にも、バルト海沿岸諸国の作家と同作品のラトビア語への翻訳者が対象とされるようになった。

2011年は前年５月末日から一年間に出版された28作品を審査対象とし、すでに受賞歴のある現代最も活躍するラトビアの児童文学作家マーラ・ツィエレーナが最近の三作品『アウレリー姫と木のお化け』（*Princese Aurēlija un kokspoki*, 2011）、『鼻高々』（*Deguns debesīs*, 2011）、詩集『キリンの襟巻き』（*Žirafes šalle,* 2010）で、アレクセイス・ナウモヴァが絵本原画で受賞。詩人ユリス・クロンベルグスと画家アネテ・メレツェの共作『雲の本』（*Mākoņu grāmata*, 2010）に審査員特別賞、エストニアのアンドルゥス・キヴィレフク（1970-）のアニメーション映画で人気を博した『発明村のロッテ』（*Lote no Izgudrotāju ciema*, 2007）に国際賞が授与された。同作のアニメ第一部は、発明村に偶然流れ着いた日本のミツバチに村民たちが柔道を教わり、果ては日本まで柔道の試合に出かけるというストーリーである。

② 1982年に地方都市ルォヤではじまった**パスタリンシュ賞**は、児童書と絵本原画を対象とする。作家ビルズニエクス・ウピーティス（1871-1960）

の「末っ子三部作」（*Pastariņa triloģija,* 1922～1924）にちなんだ名称で、隔年の受賞式は、作家の生誕日の４月６日に開催されている。

③　ラトビアの国立図書館は従来の老朽化した建物に代わる別名「光の城」という新館の建設が進められており、首都リガが欧州文化都市となる2014年に合わせての完成が心待ちにされている大規模な国家プロジェクトである。

現在建設中のラトビアの新国立図書館
（写真 Vilnis Auzins）

同館児童文学センターが主催する**子ども審査員賞**は、2001年に開始された子どもたち自身が審査員となる児童文学賞で、例年３月に開催されるバルトブックフェア中に授賞式が行なわれる。審査方法は、国内573を数える図書館施設とラトビア人の移民組織のある欧米諸国14か所において、６～16歳のおよそ17,000人が年齢ごとに区分された対象作品を一年をかけて評価する。同賞の過去の受賞作品を俯瞰すると、海外の翻訳作品から次第にラトビア語作品に移行していることから、同賞がラトビア語の読者を育成しているととらえられよう。

④　専門的かつ芸術的な出版物に授与される**金のリンゴの木賞**を数多く受賞してきた「大と小」（*Liels un Mazs*）社は、ジャーナリスト出身の作家イネセ・ザンデレ（1958-）が2004年に立ち上げた児童書専門の出版社である。ザンデレの軽妙な児童向け詩集『内と外』（*Iekšiņa un āriņa,* 2008）は舞台化を経て４版を重ね、「黄金のラトヴィア文学百選」に21世紀の児童書として唯一選ばれている。ザンデレ作『妹と兄』（*Māsa un brālis*, 2006，2008年子ども審査員賞受賞式に合わせてアニメ化）は多数の受賞をもって高く評価され、また『ラトビアのけものたち』（*Latviešu zvēri*, 2009）では若手アーティストによる写真と仮装とデザインをコラボレーションした新たな絵本の形態で、バルトヴィルクス賞アート部門賞を受賞した。

繊細な画風が印象的なアニタ・パエグレ（1956-）は、2012年の国際アンデルセン賞にバルト三国から単独ノミネートされた。『ニャウとムルル』（*Ņau un murr*, 2005）の金のリンゴの木賞ほか、タリン・イラストレーション・トリエンナーレ賞、バルトヴィルクス賞、ゼベリンシュ賞など多数を受賞した。

⑤　**ゼベリンシュ賞**は、地方都市クルディーガで地元出身の画家インドリキス・ゼベリンシュの生誕125周年（1992）にはじまり、ラトビア語の絵本画家と地元出身の作家を対象に５年毎に開催されている。

⑥　星 ABC（Zvaizgzne ABC）出版社は、1993年の設立以来、教科書ほか児童書を多く出版しているが、近年、内容とともに視覚的にも現代的で芸術性の高いラトビア語の児童書を対象に**星の本青少年図書賞**を主催している。

７．流通

児童書には学校の副教材に類する200円程度の簡易な装丁がある一方で、詩集など美しい書籍は年中行事や記念日の際の贈り物の代表格であることから、趣向を凝らした装丁の絵本は高価なものとなる。

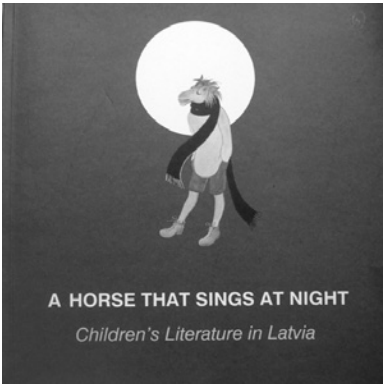
日本の消費税に相当するラトビアの付加価値税は22％であるが、出版業界、図書館協会、書籍の流通に関わる諸団体による働きかけにより、原語がラトビア語の書籍及び教材に関る付加価値税は12％とされている。

児童雑誌には、バルトヴィルクスが1958年に創刊した自然をテーマにした『小鳥』（*Zīlītes*）のほか、1991年創刊の幼児向け『ハリネズミ』（*Ezis*）があり、いずれも月額購読料が日本円にして150円前後と安価で、絵本作家自身が編集に携わっていることにより信頼性が高い。インターネット上でも閲覧可能である（www.ziliteunezis.lv）。ラトビアの民話、童話専門の「童話ネット」（www.pasakas.net）においては、国内の著名な舞台役者らによる童話の読み聞かせや、童話を元に作成されたアニメーションの視聴で子育て世代に広く普及している。

「真夜中に歌う馬」

本文を作成するにあたり、ラトビア文学センターにブックレット『真夜中に歌う馬：ラトビアの児童文学』（*A horse that sings at night - Children's Literature in Latvia*, 2011改訂版）を提供いただいた。

「真夜中に歌う馬」という詩的なタイトルと表紙に目が留まるが、これは国民的な詩人オヤールス・ヴァーツィエティス（1933-83）の小品を引用したものである。



「真夜中に歌う馬、ラトビアの児童文学」
（表紙画 Ūna Laukumane）

泣いたってかまいません、笑ったってかまいませんよ
ぼくに真夜中に歌う馬がいることを。
メロディーもなく、
歌詞もなく、
歌そのものだってないし、
馬そのものもいないんです。
でも、生きるにはそのほうがいいんです、
真夜中に歌う馬がいるほうが。

（詩集『ハ短調』（Si minors, 1982）より
『ちっちゃなお話』（Minipasaciņa）筆者訳）

人が寝静まる真夜中に、馬が歌ったかどうかなどだれにもわからない、たとえ他人に笑われようとも、人は自分だけの幻想を持ちつづけるほうがいいのだと、詩人はソ連時代に自由な心のあり方を提唱した。

ラトビアにおいて、英語圏文化の強力な拡張を背景に少数民族の児童文学はいかにあるべきか、また、インターネット世代に提供する書物と図書

館はどうあるべきかが模索され、こうした児童書をめぐる活動に対する公的支援が求められている状況において、児童文学関係者らが「真夜中に歌う馬」の精神を継承しようとしていることに敬意を表したい。

児童文学者のイルゼ・スティカーネ教授は、近年のラトビア語オリジナル作品の出版が期待以上に多かった（56作品）ことは嬉しい驚きであり、新しい作家の登場によってラトビアの児童書はますます豊かになっているとの報告書（2010）をまとめている。そのうちのラウラ・ドレイジェ（1990-）が17歳で発表した『竜の歌』（*Pūķa dziesma*, 2007，星の本青少年図書賞）は、中世の日本を舞台とする少女キミコと少年ヒデアキの物語であることから、若年世代における未だ日本への関心の強さがみられる。

最後に、イルゼ・スティカーネ教授（Prof. Ilze Stikāne）ほか、ラトビア文学センター（Latvijas literatūras centrs）、ラトビア国立図書館児童文学センター（Latvijas nacionālās bibliotēkas bērnu literatūras centrs）、ラトビア文化省（Latvijas kultūras ministrija）の各担当官の御協力に心より感謝いたします。

（くろさわ　あゆみ　ラトビア語翻訳通訳）

インドネシアの児童書事情：現状と歴史的背景

シルヴィア・チョクロワティ・ミヒラ

IEA（International Association for the Evaluation of Education Achievement）が1992年に実施した調査によれば、インドネシアの小学校児童の読書能力は東アジア30か国中29位とほぼ最下位であった。また、世界銀行が1998年に行った調査 Education in Indonesia from Crisis to Recovery においても、インドネシアの獲得ポイントは51.7で、フィリピン（52.6）、タイ（65.1）、シンガポール（74.0）、香港（75.5）の諸国・地域の最下位とされ、インドネシアの多くの新聞やブログが引用し、ひとしきり議論になった。なぜ、インドネシアはこのような状況にあるのだろうか？この問題に関して、１．児童書の刊行数、２．児童書への接触機会、３．社会の読書文化、の側面から考えてみようと思う。

スラム街の子どもたち、公園で勉強中

１．児童書の刊行数

IBBY（The International Board on Books for Young People）の2001年年報に掲載された Anne Pellowski の報告によっても、また、筆者がジャカルタ、ボゴール、バンドゥン、スラバヤの４大都市において観察（2004年、2005年、2007年、2008年）した印象からも、以下の諸点を指摘できる。①基本的にインドネシアにおける児童書の刊行数は少ない。②インドネシア作家の児童書は文章が多く絵が少なく、児童にとって魅力に乏しい。③絵が多く多色刷りの外国翻訳絵本の方がより児童の関心を惹き、良く売れるので、出版社は外国の翻訳絵本の出版に傾斜しがちである。④出版社は、特にインドネシア作家の児童書の出版にはその売れ行きに関しての不安と採算性への懸念から、消極的な傾向が見られる。次に、児童書のジャンルを二つに分けてその歴史を振り返ってみる。

1.1.　絵本・読み物

蘭印（オランダ領東インド、現インドネシア）政庁は19世紀末頃から、倫理政策と称する被植民地人の福祉にも目を向ける政策を採用し始めたが、その一環として、1908年、Commissie voor de Inlandsche School en Volkslectuur（CISV、現地民向け小学校の教科書および大衆向け読み物のための委員会）を設置した。この委員会は、1917年、蘭人ジャワ学者 D. A. Rinkes が運営を受け継ぎ、Balai Pustaka（出版所、独立後は国営出版所）と名称を変更し、現地民向けの書籍出版に主要な役割を果たした。

1909年には、Ki Amongsastra 等が民話から採話したジャワ語の『豆鹿の冒険』が中ジャワ北岸のスマラン市で H. A. Benjamin によって出版された。また、この時期に、蘭人作家 Nittle de Wolf van Westerrode の作品『蘭印の子供達の暮らし』が出版されたが、Balai Pustaka はこれに触発されて、1920年から創作コンクールを開催するようになった。最初の優勝作品は北スマトラの小学校長 Mohammad Kasim 作の児童向け物語『子供世界の風景』（後に、*Si Samin*（人名）と改題）で、版を重ね長く読み継がれた。この時代のもう一つの傑出した児童書としては、Aman Datuk Modjoindo 作の『バタヴィアっ子 Si Doel』があり、これも今日に至るまで Balai Pustaka から版を重

ね、また映画化もされた。この時期に、西ジャワのスンダ語で児童書を多数出版した作家が三人いた。D. K. Ardiwinata、Satjadibrata、および Samsoedi である。また、植民地期には、「ピノキオ」などを始めとする欧州の児童書が少なからず紹介された。

1950年５月、Ikatan Penerbit Indonesia（IKAPI、インドネシア出版社協会）が全国の出版社42社の参加を得て中ジャワのヨグヤカルタで結成された。この時期の IKAPI 加盟出版社は政府刊行物出版への依存度が高かった。1969年、スハルト政権は学校とイスラム塾向けの教科書新規出版プロジェクトを発足させたが、一時、教育出版業務を教育文化省の業務とした。これには IKAPI 加盟各社の反発が大きく、政府は1974年、大統領訓令（Instruksi Presiden ; Inpres）に基づいて小学校向け教科書・副読本（Inpres 本と呼ばれるようになった）を、教育文化省監督下で、IKAPI 加盟の民間出版社に発注することとした。IKAPI 加盟社の数は1966年には450社、1973年には80社、1974年に

スラバヤの本屋さん

は166社と増減しているが、これにはこうした事情があったのである。

こうした政府プロジェクトの結果、児童書の内容の画一化が進んだ。取り上げられるテーマは環境問題、冒険物語、道徳といったものが多かった。これらのテーマに沿ったフィクション、ノン・フィクションの創作コンクールも開催

されて、その優勝者作品が Inpres 本として教育文化省の補助金で刊行された。これらの作品の内容は、子ども達が楽しく読めるというより、政府のスローガンや政府開発プロジェクトの成功を広報するような内容ばかりで、児童書としては面白みを欠いた。いくつかの出版社は Inpres プロジェクトから撤退し、より高い採算性を求めて翻訳本出版に向かった。その結果、書店には多数の翻訳書が並ぶことになった。Dorothy Edwards の「悪戯っ子の弟」シリーズ、A. A. Bukkeridge の「*Jennings*」シリーズ、Tony Wolf の「おもちゃの動物」シリーズ、Marcia Leonar の「動物の初めての冒険」シリーズ、そして、一連のディズニー物などである。これらの翻訳物は多色刷りの絵が入っていることなどから、高価でも、Inpres 本よりは人気を博した。これに対して作りもタイトルも地味な国内作家の作品は埋没し、図書館の書架でしか見られないものとなってしまった。それらの多くは政府の補助金で出版されたものだからであった。

とはいえ、国内作家の作品でも優れた物が無かった訳ではない。『豆鹿くん』（Dipodjojo 作，1966）、『醜い顔のお姫様』（Poppy Dongo Hutagalung 作，1976）、『金の卵を産む鶏がいなくなってしまった』（Djokolelono 作，1977）、『マデと 4 人の仲間達』（Suyadi 作，1979）、『*Sri Rejeki*（人名）』（Dwianto Setyawan 作，1985）、『Dayak 族』（Djumari Obeng 作，1996）、『Asmat 族の子 Osakat』（Anie Bahri Arbie 作，1996）などを国内作家の作品として挙げることができよう。

1.2.　コミック

インドネシアのコミックの歴史は1930年頃にさかのぼる。ムラユ語の華人日刊紙『*Sin Po*』に掲載されたKho Wan Gie（1908-1983）によるインドネシアの華人青年を描いた 4 コマ漫画「*Put On*（人名）」、純インドネシアのコミックとしては、日刊紙『東方王（*Ratoe Timur*）』に1939年から掲載された Nasroen As 作の『緑姫（*Putri Hijau*）』、また日本軍政期（1942年～1945年）には、ヨグヤカルタの日刊紙『*Sinar Pagi*』に B. Margono の伝説に基づくコミック「*Roro Mendut*」が連載された。インドネシア独立（1945年）後の

1948年から、日刊紙『人民主権（*Kedaulatan Rakyat*）』に Abdul Salam がコミック「ディポヌゴロ王子（*Pangeran Diponegoro*）」、「*Joko Tingkir*（ジョコ・ティンキル、ジャワの英雄の一人の名）」、「日本軍政期の物語」を相次いで掲載した。1952年になると、R. A. Kosasih が、民話に基づいた英雄物コミック『*Sri Asih*（女性名）』を描いた。1957年からは、Tino Sidin が、『ヤニ大尉（*Kapten Jani*）』、『ナヤン司令官（*Panglima Najan*）』、『リスのチップ（*Tjip Tupai*）』、『密林の英雄マラ（*Mala Pahlawan Rimba*）』を刊行した。

1970年代から1980年代、インドネシアはコミックの黄金時代を迎えた。刊行されたコミックのジャンルとタイトルも多様化した。この時期に特に人気を博したジャンルは都市域の少年少女ロマンで、著名な描き手として、Budijanto、Zaldy Sim、および Jan Mintaraga（Jan の代表作は『*Sebuah Noda Hitam*』）を挙げることができる。Silat（インドネシアの護身術）の達人の冒険物も人気で、Ganes T. H. が、「幽霊洞窟から来た盲目の達人」シリーズ、『白狼の化身』、『Kedaung の地主』、『ジャンパン君（*Si Djampang*）』等を刊行した。Hans Jaladara の『髑髏の旗』、Wid N. S. の『*Godam*（人名）』、Hasmi の『雷神の子 Gundala』も人気を博した。この他、Inri S のインドネシア影絵劇ワヤンから題材を取った『マハバラタ』などのコミックも多数刊行された。

次いで登場したのがアメリカのコミックの翻訳本であった。例えば、「*Flash Gordon*」、「*Rip Kirby*」、「*Prince Valiant*」、「*Tarzan*」、「*Superman*」、「*Garth Goofy*」、「*Mickey Mouse*」、「*Donald Duck*」等である。また、Herge 作の「*Tintin*」などのベルギーからのものもあった。翻訳もののコミックの影響を受けた類似作品も多く出版された。

1990年代に入ると、日本のコミックがインドネシアに入ってきた。ジャカルタの出版社 Elex Media Komputindo（最大日刊紙 *Kompas* を刊行する Gramedia グループ傘下）が「キャンディ・キャンディ」、「カンフーボーイ（鉄拳チンミ）」、「ドラえもん」、「クレヨンしんちゃん」、「ドラゴンボール」、「セーラームーン」等を出版した。これらのコミックは大ヒットし、版を重ねた。同社はさらに、2004年頃から、日本で人気のある『なかよし』、『少年マ

ガジン』などの雑誌もインドネシア語訳して出版した。また、出版社 M&C（Gramedia 傘下）は少女向けに雑誌『*Cherry*』、『ちゃお』、『ショウコミ（少女コミックの略）』や『*Flowers*』を翻訳刊行した。1999年には、バンドゥン市の出版社 Megindo が、コミックを含む日本の最新の文化を紹介・分析する月刊誌『*Animonster*』を出版したが、多数の日本コミック愛好家を背景に、８年間で３万部という、インドネシアではヒット雑誌となった。

翻訳本

日本コミックの人気を背景に、2002年、ジャカルタで Elex Media Komputindo との協力で、「マチコ漫画スクール」が設立され、多数の生徒を集めている。設立者は漫画家まえやま・まちこ氏とのことである。バンドゥン市にも Ruben なる人物によって設立された Acolyte という漫画学校がある。

また、Dwi Koendoro、G. M. Sidharta、Keliek Siswoyo、Rahmad Gazali など新聞漫画を主に描いて活躍しているインドネシア人漫画家も健在である。

２．児童書への接触機会

インドネシアでは全般的に本の値段が高い。2006年の時点で、ポケット・ブック版の小説１冊の値段は１万５千ルピアから３万ルピア（約185～375円）であり、これはジャカルタでのバス（１区間）代の12倍、道端の屋台での夕食代の

6回分に相当する。

平均月収50万ルピア（約6,250円）の勤労者の子どもにとって児童書は遠い存在であり、購入できるのは都市の富裕層の子ども達である。購入できない子どもにとって児童書との接触機会は図書館であるが、その数は多くない。さらにコミックや雑誌の貸し付け施設もあるが、無料ではない。

ジャカルタの本屋さんで本を探す少年

インドネシアで初の公設図書館は Batavian Kerkeraad（バタヴィア教会評議会）で1624年に聖職者向けに設立された。1778年、蘭印政庁は Batavia Association for Arts and Science 図書館を公文書館として設立した。現地の公文書や刊行物の保管所である。のちにインドネシア独立後はそれが国立図書館となった。植民地時代には私設図書館や教会付属図書館もあったが、これらの図書館にあるのは蘭語の書籍ばかりで、被植民地人が望む書籍や情報を得る場として貢献することはなかった。

1908年に上述の CISV（後の Balai Pustaka）が印刷・刊行所として設立されて以来、絵入りの雑誌や年刊の参考書が現地語で刊行されるようになった。Balai Pustaka の刊行書は縦横3メートルの書棚に入れられて学校、病院、兵舎などに配布された。学校の校長・教師は貸し出された本の数や書名をバタヴィアに報告することが義務付けられた。しかし、出版社としての Balai Pustaka

の出版物は政府（蘭印政庁およびインドネシア政府）の政策を支持する内容のものでなければならなかった。

これらの公共図書館の設置と並行して、1790年から1900年の頃、ジャカルタには民間の図書館とも言うべき貸本屋が存在した。しかし、この貸本屋は蘭印生まれの華人（プラナカン（peranakan）と呼ばれた）を対象としたものであった。1870年代以前には蘭印には地場書店は存在せず、欲しければ出版社に直接注文するほかなかった。

インドネシアの初代大統領スカルノの時代（1945年～1966年）、文盲撲滅によって国家建設を推進しようというプログラムが実行された。1948年、このプログラムを実行するためのみに設立された省が主導して活動が開始され、村・町、郡、県、州までの各段階で図書館が設立されたが、広く利用されるところとならず、資金不足から閉鎖されたところも多かった。

スハルト政権の1960年代から1970年代、インドネシア・コミックの人気高揚期があり、コミック本は大都市の貸本屋で、そして書店、読書園（後述）といった出版社の独自の経路を通じて流通した。しかし、営利企業が行っていたためどんな本でも人気さえあれば、ポルノでも出版・流通された。そのため、貸本屋の評判は悪化し、有害コミックを貸し出していた多くの貸本屋が政府によって閉鎖させられてしまった。

1970年代から1980年代にかけて再び貸本にブームが訪れた。人々の所得水準が向上してきて読書層が拡大したものの、書籍価格はさらに上昇していたためであった。1980年代の初頭には理想主義に基づいた非営利貸本所が相次いで開設された。しかしながら、ほとんどが運営を長続きさせることはできなかった。

1992年の初め、識字教育の一環として政府は地方自治体が援助する Taman Bacaan Masyarakat（TBM、コミュニティー読書園）を設置し始めた。1995年、スハルト大統領は、毎年の５月を国民読書月間と定め、政府は特に村落レベルの TBM に重点を置いた。しかしながら、TBM の書籍は政府の政策宣伝等が多かったため普及せず、また金融危機・経済悪化の影響もあって TBM も長続きしなかった。

新しい波が起きたのは1998年のスハルト体制の崩壊以後で、2001年初頭か

ら、各地の村や町で NGO やボランティア団体による多数の独立系読書園が次々と設立されるようになった。これらを、(a) 貸本屋・有料図書館、と (b) 無料読書園、の二つに分けて紹介してみる。

(a) 貸本屋・有料図書館

貸本屋や有料図書館は、過去の隆盛時ほどの数は無いが、依然として存在している。本を借りるには、お金を払って会員になる必要がある。さらに本を借りる毎に大体、本の価格の10%程度の借料を払う。学園都市として知られるバンドゥンでは、町の至るところに貸本屋があり、小説やコミックを貸し出しており、生徒達に人気が高い。貸本屋の中で読む場合は書籍価格の５%、自宅で読むために借り出す場合は10%を徴収される。このような貸本屋の中にはマカッサルやジャカルタで見られるように Kafe Buku（ブック・カフェ）に進化した例が出てきた。それらは、「読んで食べることのできる新しい居心地の良い場所」のキャッチ・コピーで登場してきた。飲食という新サービスを付け加えたのである。また、“Books, Library and Handicraft” のキャッチ・コピーで、本を安く売ったり、貸したりする他、バティック（ジャワ更紗のろうけつ染め）作成実習の講習を受けられる場もある。

(b) 無料読書園（Free Reading Gardens）

今日の読書園は、b1) コミュニティーによって運営されるが政府の資金援助を得ている読書園、b2) 企業をドナーとしている読書園、b3) NGO や地元ボランティアによる読書園に大別できる。b1) の多くは政府と密接な関係を持つ団体によって運営されている。政府は特に活動内容までは関与せず、政府は資金を供与するにとどまる。一方、読書園の側の活動は、本の貸し出しだけで他の活動は行っていない。b2) の例としては民間団体 Forum Indonesia Reads と協力して店のなかに読書コーナーなどを設けている McDonald 社、100以上の村に図書館を設立した大手林業の Riau Pulp 社などが挙げられる。b3) はコミュニティーに強く根ざしており、貸し出しの他に映画上映の催し、読書グループの援助、青少年の創作クラスを設けるなどの活動も行っているところもある。

3．社会の読書文化

インドネシア社会は現時点では「日常的に読書に親しむ階層」の拡大期にある、と言えるだろう。政府や社会による読書への啓蒙活動は読書意欲向上への動機付けを与えている。1970年代初頭頃までの日常的読書階層がごく限定されていた時代には、人々は読書よりは、様々なショウや見世物を見聞することを

紙芝居を上演中の筆者

好んだ。1960年代、筆者が少女時代を過ごした村ではさまざまな行事の際に、ワヤン（影絵劇）が上演された。ちょうどその頃はテレビが普及しはじめた時期と重なるが、人々は読書よりもワヤンやテレビをより楽しんでいた。そのあと人気となった絵が主体のコミックはこうした視聴覚文化に近似しているといえよう。筆者が関わっている紙芝居の活動もその延長上にある。絵に描かれた世界を演者が語る紙芝居はまさに絵で表現されたワヤンに他ならない。理想としてはこれらの視聴覚文化に近いものと読み物が並行して子ども達に普及してゆくことである。そのためには、長く読み継がれるような作品を生み出す作家の誕生が望まれる。また、その初期過程としての幼小児向けの絵本を提供する自治体所有図書館や学校図書館の整備・強化も不可欠である。

（しるづぃあ・ちょくろわてぃ・みひら　児童文学研究者）

2011年度児童サービス協力フォーラム
～公共図書館による学校・学校図書館に対する学習支援～

国際子ども図書館では、都道府県立図書館による児童サービス支援の在り方についての意見交換・相互交流の場を設け、関係者間の連携・協力を促進するため、2010年度から３年間の予定で「児童サービス協力フォーラム」を実施している。２年目に当たる2011年度は「公共図書館による学校・学校図書館に対する学習支援」をテーマに、2012年３月12日（月）に開催した。都道府県立図書館や市町村立図書館で学校支援を担当する図書館員を中心に、全国から74名の参加があった。

事例報告の様子

●第１部　事例報告

・鳥取県立図書館における教職員・生徒向けセミナー、学校司書向け研修について　高橋真太郎〔鳥取県立図書館支援協力課〕

・大阪府立中央図書館の学校支援　藤田章子〔大阪府立中央図書館協力振興課〕

・座間市立図書館における自由研究応援講座について～読書環境の整備と学校・学校図書館との連携～　葉山（三村）敦美〔座間市立図書館〕

・国際子ども図書館「学校図書館との連携による学習支援プロジェクト」について～図書館員の視点・教員の視点～　橋詰秋子〔国際子ども図書館児童サービス課〕

●第２部　ディスカッション

学校・学校図書館から見た公共図書館の学習支援活動：効果的な連携のために

・コーディネーター

堀川照代〔青山学院女子短期大学教授〕

・コメンテーター

鎌田和宏〔帝京大学文学部教育学科・教職大学院教職研究科准教授〕

小石都志子〔東京都大田区立大森東中学校教諭〕

中村伸子〔千葉県袖ヶ浦市学校図書館支援センタースタッフ〕

ディスカッションの様子

第１部では、各公共図書館で行っている学校や学校図書館への学習支援の事例を報告した。国際子ども図書館からは、2010、11年度で実施した学校図書館との連携による学習支援プロジェクト<本文73ページ参照>の概要を報告した。

第２部では、まず、第１部で報告された教員向けの教材開発研修、学校司書向けのセミナー、生徒向けの自由研究応援講座などの事例の意義や課題につい

て、それぞれの立場からのコメントを述べた。その後、コーディネーターの堀川照代氏の進行により、フロア全体を交えたディスカッションを行い、公共図書館と学校・学校図書館との連携に当たっての課題を整理した。

主な課題として、以下のことが挙げられた。

・学校への団体貸出制度など、公共図書館側で学校支援のサービスを制度化するのは大切だが、その制度が実際に図書館を使った授業をしたいと考えている教員にとって使いやすいものであるかが重要。使う側からのフィードバックを積極的に受ける必要がある。

・現状では図書館を活用した授業をする教員はごく少数である。あらゆる機会をとらえて図書館を使った事例を発信しないと、学校現場での図書館活用を促進することはできない。地域の教育行政の場で公共図書館の有用性を訴えていくことも必要である。

参加者からのアンケートでは、公共図書館の具体的な事例を聞くことができたことや学校・学校図書館側からの話を聞くことができたことを評価する意見が多く、満足度も高かった。一方で個々の事例発表をもう少し時間をかけて聞きたかったという意見も目立った。なお、当日の配布資料とディスカッションの記録の概要は、国際子ども図書館のホームページで公開している。

（児童サービス課）

「日本の子どもの文学――国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」展を企画して

宮川　健郎

はじめに

2011年２月19日、国際子ども図書館３階の本のミュージアムで、展示会「日本の子どもの文学――国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」がスタートした。

今回の展示会は、国際子ども図書館としては、はじめて日本の子どもの本の通史をあつかったものである。会期も長く、４年半程度つづく予定の、常設展ともいえる展示会だ。

「日本の子どもの文学」展は、私の監修による。私と国際子ども図書館各課の職員で構成された８人ほどのチームが２年間で企画編集の仕事をし、何とかスタートにこぎつけた。ここでは、この展示会を作った考え方や、展示会の構成や内容を紹介していきたい。

展示会の作り方

国際子ども図書館がオープンして11年ほどが経過したところではじまった今回の展示会は、実は、国際子ども図書館の資料の棚卸しのような面をもっているのではないか。

展示会は、明治から20世紀末までの日本の子どもの文学の歴史を230点ほどの資料で簡潔に見せるというものだ。その230点ほどは、国際子ども図書館の蔵書目録からピックアップしたのではない。まず、鳥越信編『日本児童文学史年表』１・２（『講座日本児童文学』別巻１・２、明治書院、1975～77年）から、展示に必要と思われる本や雑誌のタイトルをひろい出していった。「鳥越年表」とも呼ばれるこれは、明治から太平洋戦争が敗戦でおわるまでの時期の子どもの文学の各ジャンルの作品の戸籍調べを徹底して行った書物である。本や雑誌のおそらくは９割ほどまでが、発行年月日を特定して掲載されている。敗戦からあとの時期については、児童文学関係の事典類などを参考にしながら、

タイトルを書き出していった。

このようにして展示目録を作っていったのだが、これは、いわば架空の目録である。つぎには、この架空の目録と国際子ども図書館蔵書目録とを突き合わせることをした。展示に必要な資料が所蔵されているかどうかを確認していったのである。所蔵がなくて、別の資料との差し替えを検討しなければならないことも多かった。

実際に展示を見てくだされば わかるが、展示ケースには、この図書館が所蔵している原本にまじって複製版がならんでいたり、初版ではなく版違いの資料がならんでいたりと、展示は少しごちゃごちゃな状態だ。複製版のほうが、かえって色がきれいだったり、原本が色がしずんでいたりという面白さもあると思うのだが、これは、現在、国際子ども図書館が所蔵している資料の状態の反映というふうに見ていただければ、ありがたい。国際子ども図書館にどういうものがあって、逆に、どういうものがないのかということも、そこからうかがい知ることができるはずだ。

展示会の構成と子どもの読書の特質

展示会は、資料をひたすら刊行年順にならべ、そこから、その時々の問題を解説パネルとして切り出していくという作り方をした。このようにして日本の子どもの文学の歴史をたどっていく展示会だが、子どもの文学の当の読者である子どもたちには、そうした歴史的な観点がないということも同時に考えなければならない。歴史を語るのは、大人たちの仕事なのかもしれないのだ。

私の観察では、10歳くらいまでの子どもたちは、自分の好きな本でも作者を意識しない。私はもう30年近く大学で教えているが、私の研究室に来た学生が、『おしいれのぼうけん』（童心社、1974年）と『モグラ原っぱのなかまたち』（あかね書房、1968年）の作者が同じ古田足日であるということを、子どものときは考えていなかったけれど、研究室の本棚を見ていて、いまはじめて気がついたというような場面を何度も目撃している。

「日本の子どもの文学」展は会期の長い展示会だといったが、特定の作家や詩人をとりあげ、大きな展示ケース３つで見せる「児童文学者コーナー」は、

半年ごとに展示替えをする。スタートのときは石井桃子、つづいて2011年が没後50年にあたった小川未明、2012年２月から、子どもの詩や絵本の書き手でもある谷川俊太郎、８月からは宮沢賢治とつづく。資料保護のために、やはり半年ごとに、展示している雑誌を同じタイトルの別の号に差し替えるようなことも展示会場のあちこちでしているから、これは、少しずつ変化・成長する展示会といえるだろう。

時期区分をめぐる問題点

先に書いたように、「日本の子どもの文学」展は、ただ刊行年順に資料がならんでいるが、時期区分はしている。この時期区分が妥当であるかどうかということを、あらためて考えてみたい。

最初はあまり古いところからではなく、雑誌『赤い鳥』（1918年７月創刊）から見てもらおうということで、「『赤い鳥』創刊から戦前まで―「童話」の時代」という区分にした。これもふくめて、展示会の章立ては以下のようである。

・第１章　『赤い鳥』創刊から戦前まで――「童話」の時代
・第２章　戦後から1970年代まで――「現代児童文学」の出発
・第３章　1980年代から1999年まで――児童文学の現在
・第４章　現代の絵本――戦前から1999年まで
・第５章　子どもの文学のはじまり

（このほかに「童謡」「国語教科書と児童文学」の展示、先に述べた「児童文学者コーナー」がある。）

第１章は「『赤い鳥』創刊から戦前まで」。「戦前まで」としたが、ほんとうは、「敗戦まで」あるいは「戦中戦後まで」とでもしたほうがよかったのかもしれない。第２章は「戦後から1970年代まで」となっているので、戦中期が区分の上でブランクになっている。それは、少し変といえば変なのだが、戦中期というのがある種の空白期として意識されていて、それから戦後がはじまるという区分になっている。解説パネルには、「一方で、既成の作家たちは、戦争協力の態勢を強めていきます。「戦前」と「戦後」のあいだの「戦中」は、子どもを戦争へと追い込む作品が数多く書かれ、子どものためのものであるはずの児童文学が機能しなくなった空白期といえるかもしれません。」と書いた。

展示会の時期区分に関してもう一つ。

第３章は、「1980年代から1999年まで――児童文学の現在」としている。「児童文学の現在」というならば、2000年代まで扱わないと現在といえないのではないかとも思うのだが、2000年代になってからの作品の何をどういうふうに取りあげるかは、もう少し議論を深めないと決心のつかないことがたくさんあったので、1999年までの範囲でおさめることにした。

第３章を1980年からとしたのは、その年に、『ズッコケ三人組』シリーズ全50巻（ポプラ社、1978～2004年）で子どもたちによく知られている那須正幹の『ぼくらは海へ』（偕成社）が出版されたからだ。この作品がそれまでの現代児童文学のあり方とだいぶちがったものになっているために、ここから、つぎの時代に入ったと考えている。

小川未明に代表される「近代童話」を批判的に検討しながら、新しい児童文学を模索したのは1950年代だった。50年代の議論は、「童話伝統批判」と呼ばれる。詩的で象徴的なことばで心象風景を描くようなものだった「近代童話」は、やがて、もっと散文的なことばで子どもをめぐる状況（社会といってもよい）を描く「現代児童文学」へと転換していく。15年戦争を経験したあとの時代が、児童文学にも戦争や戦争を引き起こすこともある社会を語ることを求めていた。佐藤さとる『だれも知らない小さな国』（講談社）や、いぬいとみこ『木かげの家の小人たち』（中央公論社）が刊行された1959年が現代児童文学の出発の年である。この２作品は、いずれも散文的なことばで構築された長編ファンタジーで、どちらも戦争体験を下じきにしていた。

山中恒の社会主義的なリアリズム『赤毛のポチ』（理論社、1960年）や、松谷みよ子の民話の再創造『龍の子太郎』（講談社、1960年）、今江祥智の少年小説『山のむこうは青い海だった』（理論社、1960年）など、現代児童文学の出発期の作品は、それぞれ独自の作品でありながら、共通項を引き出すことができる。それは、人間は成長すべきもの、世の中は変革されるべきものという考えだ。出発期の現代児童文学は、子どもをめぐる問題は子どもの力によって必ず乗り越えられ、状況は変革できるという理想主義で書かれていた。ところが、その後、問題は必ず乗り越えられるかどうかわからないと考え直されるように

なる。児童文学の理想主義を見直すきっかけになったのが那須正幹の『ぼくらは海へ』だった。困難な現実をのがれて、ちっぽけないかだで海へ出て行ってしまう少年たちを描いた長編である。

実際に展示しているのは1999年までの作品だが、2000年代も、基本的には1980年代からの状況がつづいていると考えている。解説パネルには、「その後の児童文学は、理想主義という「決まりきった物語」をのがれて、多様に展開し、2000年代へとつづいていきます。」と書いた。

ほんとうに「童話」から「児童文学」へ転換したのか

前節で、「近代童話」が「現代児童文学」へと転換したと書いた。

ところが、2000年代になって振り返ってみると、日本の子どもの文学は、小川未明に代表されるような童話とほんとうに分かれたのかどうかと思えてくる。未明的なものは、案外あちこちに残っているのではないか。

人が死ぬ、草木が枯れる、町がほろびる……、未明童話のテーマは、ネガティブで子どもの文学にふさわしくないといわれたし、その文章も、呪文的でわかりにくいともいわれた。ところが、1980年代には、かつてはしりぞけられた死の問題などが、人間にとって大切なものとして児童文学でも書かれるようになった（那須正幹『ぼくらは海へ』前掲、森忠明『少年時代の画集』講談社、1985年など）。未明童話は、大人の文学からはっきり分かれた子どもの文学になっていない、「未分化の児童文学」（古田足日の用語）だという意見もあったが、90年ごろからは、児童文学なのか文学なのか境目がはっきりしない作品も数多く書かれている（江國香織『つめたいよるに』理論社、1989年など）。

小川未明に代表されるような童話がすたれて、新しい児童文学になったという歴史観―今回の展示も基本的にはその歴史観で作っている―をこれから先もそのまま維持していいのかどうか。今後の児童文学の動きもにらみながら、考えていかなければならないことだ。

（みやかわ　たけお　武蔵野大学教授）

小さな“コレクション展示”の試み

―「ヴィクトリア朝の子どもの本：イングラムコレクション」を開催して―

藤本　和彦

はじめに　―この展示会の企画意図―

本稿で紹介する展示会「ヴィクトリア朝の子どもの本：イングラムコレクションより」は、2011年10月５日から12月25日まで国際子ども図書館３階ホールを会場に開催した、出展数約60点という比較的小規模な展示会である。

この展示会と並行して、３階「本のミュージアム」では、同年２月から日本の児童文学の歩みを紹介する大規模な展示会「日本の子どもの文学―国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」を開催している。本展示会は近代イギリス児童文学の誕生から発達までを紹介するものであり、期せずして日本と西洋の児童文学の歩みを対比することができる機会ともなった。

そもそも「イングラムコレクション」を題材とする展示会を企画した趣旨は、当館を代表する特別コレクションであるがこれまでまとまった形で紹介したことがない[i]このコレクションの存在を広く知っていただくとともに、児童書専門図書館としての当館の蔵書構築・調査研究活動の成果を広く還元することにある。

当館では、2002年度から2004年度にかけて、米英児童文学研究の第一人者である神宮輝夫青山学院大学名誉教授を客員調査員としてお招きし、本コレクションをテーマとする調査研究を行った。その成果は、本誌第３号（2003.3）[ii]や、当館が行っている「児童文学連続講座」講義録[iii]に詳しいが、展示を通じ

---

[i]「未知の世界へ」（2003年度）など個別の企画展示において、イングラムコレクションの中から展示テーマに合致する資料を紹介したことはある。

[ii] 神宮輝夫「世界の児童書―蔵書紹介　ウイニングトン-イングラム　コレクションの魅力」国際子ども図書館の窓　（3）2003.3　pp.16-20（当館ホームページ http://www.kodomo.go.jp/about/publications/window.html#anchor3 で全文閲覧可）

[iii] 神宮輝夫「研究報告：イングラム・コレクションの魅力」 国際子ども図書館児童文学連続講座講義録 平成16年度 2005.10　pp.143-161（当館ホームページ http://www.kodomo.go.jp/study/chair/outline/16.html で全文閲覧可）

てより幅広い利用者にその研究成果が還元でき、ひいては児童書の調査研究図書館としての当館の活動を理解いただけたのなら幸いである。

イングラムコレクションについて

ここで、「イングラムコレクション」について簡単に紹介しておきたい。イングラムコレクション（The Winnington-Ingram Collection of Children's Books）は、イギリスのヘレフォード大聖堂主教座名誉参事会員エドワード・ヘンリー・ウィニングトン＝イングラム師[iv]がヴィクトリア朝[v]の道徳的、精神的価値観に沿った児童文学をテーマに収集した資料を中心とする、主としてイギリスの18世紀から20世紀にかけての児童書1,157冊からなる。のちに娘のコンスタンス・モード・ウィニングトン＝イングラム[vi]が引き継ぎ、収集対象が古典児童文学や絵本にまで広げられている。その後、コレクションは、コンスタンスがチェルトナム・レディースカレッジの副学長を務めた関係でチェルトナム・グロスターカレッジに寄贈され、さらに1996年に国立国会図書館が国際子ども図書館開設準備の一環として一括購入し、当館の特別コレクションとして現在に至っている。

ここには、「子どもの文学」が誕生したとされる18世紀イギリスで子ども向け書籍の出版を始めた代表的な出版人ジョン・ニューベリー[vii]の手による作品をはじめ、19世紀の主要な児童文学作家たちによる代表的な作品が数多く含まれている。コンスタンス以降に追加された作品を含め、18世紀から20世紀前半に至るまで主にイギリスを舞台に発展を遂げてきた近代児童文学史の流れをたどることができるコレクションであるといえる。

展示会のコンセプト

イングラムコレクションが生まれた時代は、イギリスにおける近代児童文学

[iv] Venerable Edward Henry Winnington-Ingram（1849-1930）
[v] ヴィクトリア女王統治下の1837年から1901年のイギリスを指す。
[vi] Constance Maud Winnington-Ingram（1880-1972）
[vii] John Newbery（1713-1767）

が誕生した時期と重なる。展示構成を検討するに当たっては、前述の神宮氏による研究成果を踏まえつつ、現代にまで連なる児童文学の各ジャンル―日常生活や学校生活を描いた小説、ファンタジー文学、冒険小説など―が、いかに誕生し発展したのかという点に視座を置いた。

同時に、当然ながら児童文学もその時代背景を抜きに語ることはできない。上述のとおり、このコレクションの当初のテーマは「ヴィクトリア朝の道徳的、精神的価値観に沿った児童文学」とされているが、イングラム師にとって「ヴィクトリア朝の道徳的、精神的価値観」とは何だったのか、そもそもヴィクトリア朝とはいかなる時代だったのか、その時代背景を俯瞰することにも留意した。

すなわち、イングラムコレクションに含まれる19世紀を代表する児童書約60点を題材に、時代背景を縦軸に据えて、現在に連なる児童文学の諸ジャンルの誕生から発展を紐解くことが、この展示会の基本コンセプトとなった。

展示内容から

産業革命による経済の発展を基礎に、政治・経済・文化のあらゆる面で世界に君臨したヴィクトリア女王治世下の「大英帝国」。都市化・工業化の進展は子どもを取り巻く社会環境を大きく変え、また工業化に伴う物質主義の蔓延と科学技術の進歩は旧来の宗教的倫理観にも動揺をもたらす。

貧しい子どもたちに聖書を教えるため、教訓的な物語を易しく読めるような小冊子（トラクト）を配布する「日曜学校運動」を契機に広がった子どもの本は、教育の普及に伴い子どもが自分で本を選べる環境が整うにつれ、次第に「面白くて、ためになる」ものへと発展し、子どもの興味や関心に応える様々なジャンルの作品が生まれる。また、印刷技術の進歩は、子どもの本の挿絵などにも革命的な変化をもたらす。近代化に向けた激動の中、社会の変化が人々の内面にも大きく影響を及ぼしたヴィクトリア朝の時代、近代児童文学は夜明けを迎えることとなる。

展示ではまず、教訓的な読み物から子どもたちの日常に根ざした少女小説や学校小説などへの変化を紹介する（第１章　初期の児童文学　―教訓物語から日常小説へ）。続いて、迷信的であるとして当時のイギリスではあまり受け入

れられなかったおとぎ話（フェアリーテール）が、ペローやグリム兄弟、アンデルセンなどの作品の流入によって次第に受容されるようになり（第２章　チャップブックとフェアリーテール）、産業革命後の社会矛盾の深まりや「進化論」の登場による伝統的価値観の動揺の中、人間性や想像力への再評価がもたらされ、『不思議の国のアリス』（1865年）[viii]に代表されるような自由な想像力に満ちたファンタジー文学が誕生したことを紹介する（第３章　ファンタジーの時代の幕開け）。また、従来の知識偏重の啓蒙的な読み物の系譜から、少年たちを未知の世界に誘う『宝島』（1883年）[ix]に代表される冒険小説が、帝国主義政策と表裏一体のものとして発達したことを紹介する（第４章　冒険小説の誕生）。

最後に、絵本を取り上げ、印刷技術の発達が子どもの本に与えた影響を紹介する。木口木版技術の発達が、子どもの本に不可欠な挿し絵の印刷技術の向上をもたらす中で、彫版師エドマンド・エヴァンズ[x]に見いだされたランドルフ・コルデコット[xi]、ウォルター・クレイン[xii]、ケイト・グリーナウェイ[xiii]などの絵本作家たちにより、本格的な近代絵本の時代が幕を開ける（第６章　トイブックと近代絵本の夜明け）。

おわりに

３階ホールでこのような企画展示を開催したのは、2002年５月の全面開館後では初めて[xiv]である。会場の都合上、展示冊数が限られてしまうため[xv]、観覧

[viii] Alice's adventures in Wonderland / by Lewis Carroll ; with forty-two illustrations by John Tenniel. Eighty-second thousand. Macmillan and Co., 1886.

[ix] Treasure Island / by Robert Louis Stevenson ; with illustrations by Edmund Dulac. [1 st ed.] E. Benn, 1927.

[x] Edmund Evans（1826-1905）

[xi] Randolf Caldecott（1846-1886）

[xii] Walter Crane（1845-1915）

[xiii] Kate Greenaway（1846-1901）

[xiv] 全面開館以前（2000年５月～2002年１月）には、計８回の展示会をホールで開催した。

[xv]「本のミュージアム」での展示会の場合およそ200冊かそれ以上の資料を出展するのに対し、ホールでは講演会等の行事開催との兼ね合いや、資料保存上好ましくない日ざしを避けたレイアウトとするため、50冊くらいまでが限度となる。

者アンケートでもやはり「もっと多くの資料が見たかった」という意見が多く見られた。また、資料を直接手に取って読むことができない展示会の常として、「ほかのページも見たかった」という意見が多く寄せられる一方で、解説についてはおおむね好評で、「図録やホームページでも見られるようにしてほしい」との要望も多く寄せられた。これらのご意見を踏まえ、当館ではインターネットで誰でも見られる「電子展示会」として2013年に公開することを予定している。

このような貴重なコレクションが当館にあることを知っていただくという所期の目標は、ある程度達せられたものと考えている。今後とも当館では、児童書専門図書館として蔵書の充実と調査研究を進めるとともに、その成果をいかして児童書の持つ魅力を広く紹介する「子どもの本のミュージアム」としての活動を積極的に展開していきたい。

（ふじもと　かずひこ　国際子ども図書館主任司書）

イングラムコレクションから
R. Caldecott's first collection of pictures and songs
（ランドルフ・コルデコット　絵）
London : F. Warne and Co., [19--]

東日本大震災と国際子ども図書館

飛田　由美

地震発生当日の対応

2011年３月11日の東日本大震災により、東京都台東区にある国際子ども図書館は震度５弱の揺れに襲われた。国際子ども図書館の建物は免震構造を採用しているので、強い揺れは感じられなかったが、３階のホールでは、200kg の重さのシャンデリアが大きく揺れたため、ホールを終日立入禁止とした。この地震により、永田町にある国立国会図書館では、180万冊の資料が書架から落下したが、国際子ども図書館では、施設の被害や図書館資料の落下はほとんどなかった。

震災当日は首都圏の交通機関がまひしたため、利用者の一部が帰宅困難となってしまった。翌12日朝まで施設を開放し、帰宅困難者となった利用者約20名に対し、宿泊場所と毛布、食料、水および災害情報の提供を行った。

開館時間・イベント等の変更

震災の翌日である３月12日と13日は通常どおりに開館したが、計画停電等の影響による交通機関の乱れのため、15日は11時から17時まで、17日から31日までは10時から17時までの開館とした。４月１日からは通常どおりの開館時間とした。また、12日に開催予定であった講演会「日本の子どもの文学―昨日・今日・それから」が５月に延期となったほか、14日に開催予定であった「児童サービス協力フォーラム」と27日に開催予定であった「子どものための音楽と絵本の会」、そして19日以降３月末までのおはなし会を中止とした。

被災地への支援

４月１日、国際子ども図書館ホームページに「東日本大震災と子どもの読書についての情報」のページを開設した。関連情報へのリンクや、国、図書館関連団体の動き、本や教材の寄贈、読み聞かせ等、被災した子どもたちを支援するための活動を紹介し、震災と子どもの読書に関する情報をまとめて入手できるようにした。

被災地への支援の一環として、「学校図書館セット貸出し」を被災地域とその周辺の学校図書館に対し、通常は借受校が負担する返却時の送料を無料として貸し出した。一概に「被災地」といっても被害の状態は様々であるため、その時の状況でセットを必要な学校に届けられるように、現地の教育委員会と調整しながら貸出しを行った。また、「子どものへや」で被災地の学校へのメッセージを募集し、来館した子どもが書いてくれたメッセージをポスター仕立てにして、特に被害が大きかった地域の学校への貸出資料に同梱した（**写真**）。「学校図書館セット貸出し」を利用した学校からは、「地震の被害は小さいが放射能のため外遊びができない状態で、校内で過ごす時間が多かったため、興味深い読書材が借りられてよかった」等の感想が寄せられた。被災地への支援は、2012年度も継続して行っている。

来館した子どもたちによる
被災地の学校へのメッセージ
と学校図書館セット

（とびた　ゆみ　児童サービス課長）

カリブの島で国際交流！
第77回国際図書館連盟（IFLA）年次大会参加報告

小林　直子

プエルトリコと聞くと「ああ、あのウエストサイド物語の」と思われる方が多いのではないだろうか。「ウエストサイド」以外では日本人にあまりなじみのないカリブ海の島プエルトリコは、米国の自治領である。2011年８月13～18日、その島最大の都市サンフアンにあるプエルトリコ・コンベンションセンターで、第77回 IFLA 年次大会が開催された。筆者は IFLA 児童ヤングアダルト図書館分科会（以下児童 YA 分科会）の常任委員会委員として年次大会に参加したので、担当分野の主な活動について、以下に紹介する。

■IFLA、そして児童 YA 分科会とは？

まずは、IFLA についておさらいしておこう。IFLA は、図書館協会・図書館・図書館関連機関など100か国1,000団体以上が加盟する、図書館・情報サービス関係の世界最大の国際組織である。創設から80年以上の歴史があり、児童 YA をはじめ、学校図書館・リソースセンター、書誌、議会図書館、図書館建築など、多岐にわたるテーマを扱う40以上の分科会や６つの戦略プログラム（IFLA が優先的に取り組むと決めた指定領域の活動）などを通じて、世界の図書館界の課題に取り組んでいる。国立国会図書館（含国際子ども図書館）からも多くの分科会に委員を送り出している。

毎年８月に開催される年次大会には2,000～3,000人規模の参加者が集まるが、分科会等が主催する計200以上のオープンセッションや展示会が、各分野の優良事例や最新動向についての主な情報交換や経験交流の場となっている。各分科会では、大会会期中に常任委員会会議を行い、翌年以降の大会のセッション企画や分科会のプロジェク

ト活動について話し合う。委員は世界中に散らばっているので、普段の活動はメールベースだが、年次大会は直接対面で話を詰める貴重な機会なのである。

児童 YA 分科会では、児童 YA サービスについて学び合い、各国で子どもと若者がリテラシーを身に付け、適切な図書館サービスが受けられるようになることを目指して活動している。目下注力中のプロジェクトは「絵本で世界を知ろう」「姉妹図書館」の２つである。後者については、このプロジェクトをテーマとしたセッションの概要を『びぶろす』55号で紹介しているので、そちらを参照されたい（http://www.ndl.go.jp/jp/publication/biblos/index.html）。

■「絵本で世界を知ろう」プロジェクト

このプロジェクトは、子どもたちが絵本を通じて外国の言語・文化に触れることができるような国際的な絵本リストを作ろうというもので、2010年８月の常任委員会会議で発案された。各国の図書館員が図書館で子どもによく読み聞かせたり子どもと一緒によく読む絵本――つまり、その国で児童サービスをしている図書館員が選んだ、子どもたちに愛されている代表的な絵本――を10冊選んで紹介リストを作る、という作業に、日本を含め20か国以上が取り組んでいる。当初は集まったリストを IFLA のサイトに掲載するというこぢんまりしたゴールだったのだが、メールベースの活動を進めるにつれて夢がふくらみ、リストに掲載する絵本の現物を集めて展示会も開催したい、という話になってきたところで、2011年の常任委員会である。なんと、国際的な子どもの本の専門団体である IBBY（国際児童図書評議会）と IFLA 読書・リテラシー分科会からもこのプロジェクトへの協力の申し出があり、話合いの結果、両者と共に翌年の IFLA ヘルシンキ大会と IBBY ロンドン大会での展示会開催を目指すことになった。

ところで常任委員会会議では、セッション企画やプロジェクト以外の議題も出すことができる。筆者は、東日本大震災と子どもの読書の状況について、2011

年８月上旬時点で把握することのできた復旧状況や読書支援のプロジェクト等について、報告した。大震災については、委員たちが大いに心配してくれていたところであるが、「絵本で世界を知ろう」プロジェクト展示会に話を戻すと、この出展資料を展示会後に日本に寄贈して、日本の児童図書館活動の復興支援に役立てられないか、という意見が出た。魅力的な多文化絵本セットの寄贈は、うれしい提案である。国際子ども図書館が資料を受け取り、館内での展示や多文化サービスとして外国の絵本の展示を行いたい図書館への貸出し、といった形での活用を検討していくこととなった。

■児童 YA 分科会関係のセッション

今回児童 YA 分科会は、４つのセッションを運営したが、最も参加人数が多かったのは８月18日の午後に行われたオープンセッション「我々は変化に追いついているか？子どもたちは我々の先生か？」で、90名ほどが集まった。肉声と紙の本による対面サービスが大部分だった児童 YA サービスも、デジタルメディアの台頭・普及とともにその在り方が変わりつつあり、図書館員が子どもたちの新しい要求に追いつけない状況が生じているのではないか、という問題意識から企画されたセッションである。

「読書の新しい可能性と図書館のチャンス」（チリ）、「児童図書館員のためのメディアリテラシー向上研修」（フィンランド）、「文学好きのヤングアダルトのためのバーチャルサービス」（デンマーク）、「学習のためのマンガ利用」（日本）、の４本の事例発表が行われた。日本以外の３本はデジタル時代の児童図書館サービスを模索するもの、日本からの発表は「日本発」の媒体である漫画が学習支援に果たす役割を考察するもので、いずれも社会の変化に対応した新しい試みや状況を論じる内容であった。チリ以外のペーパーについては、IFLA のサイトで全文を見ることができる（http://conference.Ifla.org/past/ifla77/2011-08-18.htm）。児童 YA サービスの変化という大テーマは、次回大会でも取り上げられる予定で、引き続き動向を注視していく必要がある。

（こばやし　なおこ　前・児童サービス課長）

講演会「占領期の児童図書：プランゲ文庫児童書コレクション」

プランゲ文庫児童書コレクションと国立国会図書館

米国のメリーランド大学が所蔵する占領期日本の出版物コレクション「プランゲ文庫」[i]には、児童書（絵本、読み物、漫画、かるた、ぬりえ等）約8,000冊が含まれている。館の方針として広く占領期資料を収集している国立国会図書館は、1991年からこのプランゲ文庫の資料をマイクロ資料により収集しているが、このうち児童書コレクションの収集は2010年度をもって完了した。

講演会の開催

坂口英子氏（左）と谷暎子氏（右）

プランゲ文庫児童書コレクションのカラーマイクロフィルムによる収集完了を記念し、2011年11月30日（水）から12月４日（日）まで米国から坂口英子氏

[i] 日本が占領下にあった昭和20（1945）年から24（1949）年まで、日本の出版物は占領軍の検閲を受けていた。メリーランド大学歴史学教授のプランゲ博士が検閲を受けた出版物をメリーランド大学に移管させたものが「プランゲ文庫」である。NDL-OPAC で検索することができ、児童書（約8,000冊）のマイクロフィルムは国際子ども図書館で、雑誌（児童雑誌約500タイトルを含む）、新聞等のマイクロフィルムは東京本館憲政資料室で利用することができる。

（メリーランド大学東アジア資料室・プランゲ文庫室長）を招へいした。2011年12月３日（土）には、坂口氏と共に、プランゲ文庫の児童書に造詣の深い研究者である谷暎子氏（元・北星学園大学文学部教授）を講師として迎え、国際子ども図書館で講演会「占領期の児童図書：プランゲ文庫児童書コレクション」を開催した。

プランゲ文庫の児童書から
『オヤコグマ』
（小山内龍文丼畫）

坂口氏は「プランゲ文庫検閲資料にみる少年・少女の占領期」と題し、当時の少年少女をめぐる時代の特徴を紹介した。講演内容は、「日常」（漫画、音楽、スポーツ、女子の憧れ）、「学校」（六三制、自治会、ホームルーム、英語、科学と原子力）、「生活」（洋食、洋裁、戦災孤児、少年犯罪）、「子どもを守る」、「米国への親しみと憧れ」の項目に分けられ、『冒険ターザン』といった漫画、『たのしいがっこう』、『ジープ』、『メリーちゃん』といった絵本、『学生宝典』、『原子爆弾』、『あたらしい憲法のはなし』といった読み物等、プランゲ文庫所蔵資料の画像が当時の雰囲気を伝えた。

谷氏は「プランゲ文庫児童出版物の研究から―児童書を中心に―」と題し、検閲の実例を紹介した。『乗物ノイロイロ』、『コドモハゲンキ』のように、事前検閲を受けて出版社が再販時にタイトルや内容を変更した例、検閲で問題視された内容（復讐、日の丸、反米思想の現れ等）、「注文の多い料理店」ほか宮沢賢治の童話が検閲を受けた事例などが紹介された。また、ゲラ刷りの『ウシカフムスメ』と検閲後刊行された『うしかひむすめ』の違いなどが、資料画像と共に分かりやすく解説された。

両氏とも、プランゲ文庫の資料からは、当時の大人が子どもに期待を寄せ、子どもと真摯に向き合っていたことが伝わってくると語った。講演後には、参加者からの質問用紙に講師が回答する形式で質疑応答を行った。

講演会場の様子

参加者アンケート（回答者数：33名）によると、満足度は「満足」「やや満足」を合わせて約94％で、自由記入欄には「資料画像を多く用いた講師の話が具体的で分かりやすかった」、「経験に基づく貴重な話を伺えた」、「検閲状況が立体的に分かった」といった感想が寄せられた。なお、講演要旨は国際子ども図書館ホームページに掲載する予定である。

職員との交流

坂口氏は、講演会前日の2011年12月２日（金）に国際子ども図書館職員と懇談を行った。坂口氏がプランゲ文庫の利用、保管、他機関との関係等について話し、国際子ども図書館からは、国際子ども図書館におけるプランゲ文庫児童書コレクションの利用状況や、今後の同コレクションの検索方法改善の見通し等について話した。

プランゲ文庫に関わるプロジェクトの企画や実務の全般に携わる坂口氏から最新の状況を具体的に聞くことができ、有意義な懇談となった。

（企画協力課協力係）

外国からのおもな来訪者

（駐日外国機関からの来訪者を含む）

2011年１月から2012年３月の間に、外国（駐日外国機関を含む）から国際子ども図書館を訪れた方々の一部を御紹介します。

年月日	来訪者名（敬称略）
2011年	
２月23日	パトリス・ランドリー（IFLA 会議諮問委員会委員長）一行５名
４月14日	ペーテリス・ヴァイヴァルス（駐日ラトビア共和国特命全権大使）
	オレグス・オルロフス（駐日ラトビア共和国大使館次席）
７月６日	トイヴォ・タサ（駐日エストニア特命全権大使）一行２名
	アーマド・リザ・アーマド・カルーディン（国際児童図書評議会：IBBY）会長
11月10日	アリ・ファド・ビルカン（ユヌス・エムレ　インスティトゥート所長）夫妻
	テラット・アイディン（トルコ大使館・文化センター代表）
12月２日	坂口　英子（メリーランド大学東アジア資料室・プランゲ文庫室長）
12月20日	キム・ギョンジュ（韓国国立中央図書館資料企画課）
	アン・オクジュ（韓国国立中央図書館資料企画課）
2012年	ジョン・T. ガスリー（メリーランド大学名誉教授）
３月25日	ジャン＝フランソワ・ルーエ（ポワティエ大学教授）
	コーネリア・ローゼブロック（フランクフルト大学教授）

（企画協力課協力係）

児童雑誌がデジタル化されるまで

伊藤　裕子

2009年度から2011年度にかけて国立国会図書館で実施された資料の大規模デジタル化では、国際子ども図書館所管の資料もデジタル化された。対象となったのは、児童書が昭和43（1968）年、児童雑誌は昭和45（1970）年（一部平成12（2000）年）までに国内で刊行された資料、約42,000冊（雑誌は製本単位の冊数）。

児童雑誌だけで見ると、約550タイトル、9,500冊。例えば、『コドモノクニ』や『コドモアサヒ』などの昔懐かしい絵雑誌、『少年倶楽部』、『少女の友』などの小説を中心とする少年少女雑誌、１・２年生を残し休刊してしまった『小学○年生』や、『○年の科学』、『○年の学習』、『中学時代』、『高校時代』などの学習雑誌、今もおなじみの『こどものとも』、『キンダーブック』など、様々なジャンルの児童雑誌をデジタル化した。

作業にあたっては、まずタイトルを選定し何年分まで撮影するかを決めた。次に１冊１冊の巻号情報、添付物の有無、資料の状態などを確認し、複本がある場合はより状態が良いほうを選ぶなどして、タイトルごとの冊数を出し、リストにした。その後、対象資料を全て利用停止にして１か所に集め、冊数の最終確認を行った。撮影業者が館外へ運び出して撮影するため、資料管理上、冊数の確認は最も慎重に行った作業だ。このような資料の総点検はめったにできないので、大変な作業ではあったが良い機会となった。

そしていよいよ撮影。順調に進むかと思いきや、なかなかそうはいかなかった。学術雑誌などと違って、子ども向けの雑誌にはいろいろな形態や仕掛け（！）があったりして大変だったようだ。折り

込みの仕掛けがある場合、どう撮影したらよいのかと聞かれたこともあった。まずは元の状態のままで撮影し、今度は仕掛けを広げた状態でもう１度撮影してもらった。仕掛けを広げることによって誌面のサイズが大きくなってしまうものは、分割して撮影されているので、広げた状態の全体画像がないのが少々残念。また、幼児向けの雑誌はボール紙のような厚くて硬い紙が使われているものがあり、それを合冊製本したためページの開きが悪く、そのままでは撮影はもちろん、閲覧もできないような状態のものもあった。それらは仕方なく製本の綴じ糸を切るなどして対応した。

そんなこんなの作業を経て、利用停止から丸１年、2011年７月にデジタル画像が館内限定で公開された。

公開当初は、国際子ども図書館内では２台の端末のみでの提供だったが、2012年１月から14台に増えた。「昔読んだ雑誌を探している。タイトルと表紙は覚えているが、いつの号かわからない。」という場合は、表紙の一覧が見られるし、「『○○○』という話が載っていた号を知りたい」という時は、目次データが入力されているものは記事名からも探せるので便利だ。また、これまでは国際子ども図書館所蔵の児童雑誌は東京本館、関西館では利用することができなかったが、デジタル化された資料は３館いずれからでも利用できるようになった。ぜひ御活用いただきたい。

（いとう　ひろこ　資料情報課）

2011年１月から2012年３月までのできごと

2011年１月から2012年３月まで、１年３か月間の国際子ども図書館の主要な活動を日付順に配列した（詳細な内容は、p.65～82「活動報告」参照）。

2011年

１月８日　大人のための「おはなし会」体験会（２月22日とも）

１月22日　講演会「シリーズ・いま、世界の子どもの本は？」第３回「いま、韓国の子どもの本は？」

１月28日　皇后陛下の展示会「絵本の黄金時代1920～1930年代：子どもたちに託された伝言」御鑑賞

２月３日　児童書デジタルライブラリーを近代デジタルライブラリーへ統合

２月16日　児童書総合目録事業運営会議

２月19日　展示会「日本の子どもの文学――国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」開始

３月29日　国際子ども図書館第２次基本計画策定

４月23日　講演会「シリーズ・いま、世界の子どもの本は？」第４回「いま、ドイツの子どもの本は？」
国際子ども図書館ホームページリニューアル

５月５日　子どものためのこどもの日おたのしみ会
「絵本ギャラリー」で「『幼年画報』掲載作品検索」提供開始、「『コドモノクニ』掲載作品検索」で画像の追加提供開始

５月14日　展示会「日本の子どもの文学――国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」関連講演会「日本の子どもの文学―昨日・今日・それから」

６月15日　平成23年度国際子ども図書館連絡会議

７月23日　講演会「シリーズ・いま、世界の子どもの本は？」第５回「いま、オランダ・ベルギーの子どもの本は？」

７月26日　館内電子情報提供サービス開始

７月30日　科学あそび2011（31日とも）

８月６日　展示会「世界をつなぐ子どもの本―2010年国際アンデルセン賞・IBBY オナーリスト受賞図書展」（～９月11日）

８月30日　2011年度図書館情報学実習生の受入れ（～９月８日）
９月30日　「国際子ども図書館調査研究シリーズ」創刊
『平成22年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録』刊行
10月５日　展示会「ヴィクトリア朝の子どもの本：イングラムコレクションより」（～12月25日）
10月８日　展示会「ヴィクトリア朝の子どもの本：イングラムコレクションより」関連講演会「イングラムコレクションの愉しみ」
10月18日　調査報告会「児童サービス研修のいまとこれから」
11月５日　子どものための秋のおたのしみ会（６日とも）
11月７日　平成23年度国際子ども図書館児童文学連続講座「児童文学とことば」（～８日）
11月９日　第13回図書館総合展に参加（～11日）
12月３日　講演会「占領期の児童図書：プランゲ文庫児童書コレクション」
12月22日　「国際子ども図書館子ども OPAC」のインターネット公開
（本格稼動は2012年１月６日）
12月27日　展示会「新春　龍づくし」（～2012年１月29日）

2012年

１月　新しい利用者サービスの開始
１月18日　電子展示会「日本発☆子どもの本、海を渡る」に英語版追加
１月28日　大人のための「おはなし会」体験会（２月７日とも）
２月１日　公益財団法人東京子ども図書館からの受託研修生の受入れ（～３月28日）
２月15日　児童書総合目録事業運営会議
２月18日　展示会「日本の子どもの文学――国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」関連講演会「谷川俊太郎さんに聞く―詩は絵本、絵本は詩―」
２月21日　展示会「子どもの健やかな成長のために―厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財（出版物）の紹介」（～３月11日）
３月12日　2011年度児童サービス協力フォーラム
３月25日　子どものための絵本と音楽の会

活動報告

（2011年１月～2012年３月）

１．児童書専門図書館としての活動

1.1　資料・情報センターとしての機能

（1）蔵書構築（蔵書統計は83ページを参照）

国内刊行児童書を納本制度により収集したほか、未収の国内刊行児童書（「ピクシー絵本」シリーズの一部等）、外国の児童書（「The speaking picture book」などの仕掛け絵本等）、国内外の児童書関連資料、児童サービス用資料及び学校図書館セット貸出し用資料の収集を行った。また、主要児童雑誌の欠号等の収集・補充に努めた（「子供のテキスト」等）。

外国の児童書については、欧米や中国、韓国等のほか、外部専門家の収集希望図書リストに基づき2011年度はアイルランドの児童書を重点的に購入した。さらに、外国児童書のより充実した蔵書構築に資するため、ラトビア及びインドネシアの児童書・児童書関連資料について外部専門家に収集希望図書リストの作成を依頼した。

また、ボローニャ国際児童図書展事務局からボローニャ国際児童図書賞（ボローニャ・ラガッツィ賞）応募作品136冊の寄贈を受けた。

資料保存として、また国立国会図書館大規模デジタル化の一環で、児童書・児童雑誌のデジタル化を行い、1968（昭和43）年までに刊行された図書のうち約32,000冊と、1970（昭和45）年までに刊行された雑誌のうち約550タイトルについて、画像データでの閲覧提供を開始した。

破損・劣化した資料については、外注により保存箱を作成した。これは2005年度から続いているもので、2011年度は100箱を作成した。また劣化の一因であるホチキスとじ資料については、2011年度も資料保存課に依頼し450冊を糸とじに変更した。

資料を収蔵する書庫は、通常は資料保存のため、温度22℃、湿度55％前後の一定の環境を保っているが、2011年３月の東日本大震災による電力不足を受け、７月から９月の間は、書庫内環境を保ちつつ、かつ、節電効果を得られる

方法として、温度設定23℃、湿度設定53％とする運用を行った。

(2) 情報サービス

○児童書総合目録の国立国会図書館サーチへの統合

児童書総合目録は、国立国会図書館（国際子ども図書館含む）のほか、国内で児童書を所蔵する主要類縁機関である大阪府立中央図書館国際児童文学館、神奈川近代文学館、三康文化研究所附属三康図書館、日本近代文学館、東京都立多摩図書館、梅花女子大学図書館、白百合女子大学図書館が所蔵する児童書・関連資料の所蔵情報を一元的に検索できる目録として、2000年５月から提供してきた。2012年１月のシステムリニューアルに伴い、国立国会図書館の新しい検索サービスである国立国会図書館サーチ（http://iss.ndl.go.jp/）へ統合した。これにより、都道府県立図書館や政令指定都市立図書館蔵書、各種デジタル資料、レファレンス情報などを同時に検索することが可能となった。

○国立国会図書館蔵書検索・申込システム（NDL-OPAC）（https://ndlopac.ndl.go.jp）への目録データの追加

2006年度から2010年度にかけて収集した米国メリーランド大学所蔵プランゲ文庫児童書のマイクロフィルム（約8,000冊分）の目録データを NDL-OPAC に投入し、OPAC での検索及び申込みを可能にした。

2011年度は、既に OPAC に投入されていた中国語・朝鮮語・アラビア語・ペルシャ語の追加データに加え、インドネシア語・トルコ語資料のデータを投入し、アジア６言語の児童書について、NDL-OPAC での検索が可能となった。

○レファレンス協同データベースへの事例提供

各種図書館からのレファレンスを中心に、レファレンス協同データベース（http://crd.ndl.go.jp/jp/public/）へ事例登録を行っており、2012年３月末現在、246件のレファレンス事例を提供している。

○外国語に翻訳刊行された日本の児童書情報

日本の児童書の海外における翻訳出版情報のデータベースであり、リサーチ・ナビ内で提供している（http://rnavi.ndl.go.jp/childbook/honyaku.php）。2012年３月末現在の収録データは、3,721件である。

(3) 利用者サービス

○来館利用サービス

2012年１月、国立国会図書館全体のシステムのリニューアルに伴い、第一資料室・第二資料室の利用者用端末を10台から16台に増設した。１台の端末で、検索、書庫資料の閲覧申込み、複写申込書の作成のほか、デジタル化画像など電子情報の閲覧が行えるようになった。2011年７月～12月の段階では、デジタル化画像を閲覧できる端末は２台だったが、端末が増えることにより、待ち時間なく閲覧できるようになった。現在、児童書や児童雑誌を含む、国立国会図書館がデジタル化した約197万点（2012年４月現在）の資料や国立国会図書館が契約する電子ジャーナルなどを閲覧できる。

また、リニューアルに伴い、端末の利用には利用者カード（IC カード）が必要になった。国立国会図書館東京本館・関西館と共通の登録利用者カードで、国際子ども図書館所蔵資料の検索、閲覧申込み、電子情報の閲覧などが行える。登録利用者カードを持っていない利用者には、入室の際に資料室利用カードに氏名、連絡先を書いてもらうことにより、当日利用カードを貸与している。

○遠隔サービス

国際子ども図書館所蔵資料について、インターネットを経由して遠隔複写申込みや図書館間貸出の申込みができる。2012年１月からの新・登録利用者制度の導入に伴い、遠隔複写サービスは、登録利用者の方及び登録している機関を対象に提供することになった。また、児童書及び関連資料に関する問い合わせに回答するレファレンスサービスについては、公共図書館や大学図書館等を通じて、インターネットから申込みができる。回答した一部の事例は、前述のレファレンス協同データベースで提供している。

(4) 国会サービス及び行政・司法の各部門に対するサービス

○国会サービス

国会へのサービスは国立国会図書館第一の役割である。国際子ども図書館では国立国会図書館調査及び立法考査局を窓口として、資料の閲覧・貸出し・複写・レファレンスなどを行っている。(統計は84～87ページを参照)

○行政・司法の各部門に対するサービス

国際子ども図書館では国立国会図書館東京本館・関西館と同様に、各府省庁及び最高裁判所に設置されている支部図書館27館に対して、資料の閲覧・貸出しなどのサービスを行っている。

1.2　調査研究支援

○「国際子ども図書館調査研究シリーズ」の創刊

2011年９月30日、調査研究報告書「国際子ども図書館調査研究シリーズ」を創刊した。創刊号のテーマは「児童サービス研修のいまとこれから」で、2010年度に実施した「都道府県立図書館等における児童サービス関連研修実施状況調査」の結果を分析・考察したものである。冊子を関係機関に配布するとともに、PDF 版をホームページに掲載した。今後、子どもの読書活動推進の現場の参考となるような内容でシリーズを刊行していく予定である。シリーズの創刊を記念し、2011年10月18日には調査報告会「児童サービス研修のいまとこれから」を開催した。報告会には、都道府県立図書館の児童サービス担当者や研修担当者など22名の図書館員が参加した。

1.3　子ども読書活動推進の支援

(1) 子どもの読書に関する情報発信の強化及びネットワークの構築

○児童サービス協力フォーラム

都道府県立図書館による児童サービス支援の在り方について、意見交換・相互交流の場を設け、関係者間の連携・協力を促進するため、児童サービス協力フォーラムを開催した。堀川照代氏（青山学院女子短期大学教授）をコーディ

ネーターに2010年度から３か年連続で行う予定である。初年度は「児童サービス研修のいまとこれから」をテーマに2011年３月14日（月）に実施する予定だったが、東日本大震災のために中止となった。2011年度フォーラムは「公共図書館による学校・学校図書館に対する学習支援」をテーマとし、2012年３月12日（月）に開催した。参加者は74名であった。＜本文39～41ページ参照＞

○「子どもの本と図書館の動き」

ホームページの「子どもの本と図書館の動き」で、国内外の主な児童文学賞決定のニュース、子どもの読書と図書館に関するニュース等を紹介している。2011年４月23日、ホームページのリニューアルに合わせて、旧「子どもと本の内外情報」を「子どもの本と図書館の動き」と改称した。

○「東日本大震災と子どもの読書についての情報」

2011年４月１日、「東日本大震災と子どもの読書についての情報」をホームページに掲載した。東日本大震災と子どもの読書に関する情報へのリンク、国や図書館関連団体の動き、被災した子どもたちを支援するための活動等を紹介している。

(2) 人材育成支援

○児童文学連続講座「児童文学とことば」

［2011年11月７日（月）～８日（火）：受講者59名］

監修：宮川　健郎（武蔵野大学教育学部教授、国立国会図書館客員調査員）

内容、講師：

・児童文学のことば、児童文学というコミュニケーション　　宮川　健郎

・絵本のことば

吉田　新一（立教大学名誉教授、元国立国会図書館客員調査員）

・現代の古典の翻訳―文体と言葉

神宮　輝夫（青山学院大学名誉教授、元国立国会図書館客員調査員）

・翻訳絵本のことば　　福本　友美子（翻訳家）

・民話とことば　　常光　徹（国立歴史民俗博物館教授）

・参考資料紹介

―児童文学と「ことば」：図書館から考えるためのブックリスト

岸　美雪（国際子ども図書館資料情報課長）

全国の各種図書館等で児童サービスに従事する図書館員等を対象として、第８回となる標記講座を開催した。当日の配布資料は国際子ども図書館ホームページで公開している。また、本講座の講義録は2012年度に刊行予定である。

○講師の派遣

2011年１月から2012年３月までの間に、図書館関係団体等の依頼により、研究会、研修会等の講師として、延べ６名の職員を派遣した。

○講演会「シリーズ・いま、世界の子どもの本は？」（第３回）「いま、韓国の子どもの本は？」

講師：大竹　聖美（東京純心女子大学准教授）、クォン・ユンドク（作家）

［2011年１月22日（土）：参加者96名］

大竹氏は韓国の絵本の歴史や特徴を紹介した。クォン氏は「日・中・韓平和絵本」プロジェクトによる自作の絵本『꽃할머니』（花のおばあさん）を朗読し、作品が完成するまでの経緯や作品の意味を語った。

○講演会「シリーズ・いま、世界の子どもの本は？」（第４回）「いま、ドイツの子どもの本は？」

講師：酒寄　進一（翻訳家・和光大学教授）、那須田　淳（作家）

［2011年４月23日（土）：参加者105名］

参加者からの質問に答える那須田淳氏（左）と酒寄進一氏（左）

酒寄氏は第二次世界大戦後から現在までのドイツの代表的な児童文学作品を紹介した。ドイツ在住の那須田氏は、ドイツ児童文学の最新状況、日本の漫画の人気、

日本の児童文学作品のドイツへの発信等について語った。

○講演会「シリーズ・いま、世界の子どもの本は？」（第５回）「いま、オランダ・ベルギーの子どもの本は？」
講師：野坂　悦子（翻訳家）、キティ・クローザー（作家）
［2011年７月23日（土）：参加者85名］
野坂氏はオランダ・ベルギーの代表的な児童文学や絵本の作家と作品を紹介した。2010年に第８回リンドグレーン記念文学賞を受賞したクローザー氏は、人生におけるお話や絵の重要性を語り、自身の作品を紹介した。

○講演会「占領期の児童図書：プランゲ文庫児童書コレクション」
講師：坂口　英子（メリーランド大学東アジア資料室・プランゲ文庫室長）、谷　暎子（元・北星学園大学文学部教授）
［2011年12月３日（土）：参加者68名］
坂口氏は、占領下の少年少女の日常や学校生活、当時の社会について、プランゲ文庫所蔵資料の画像と共に説明した。谷氏は、占領下の児童書検閲と出版の実態について、最近の研究成果を踏まえて説明した。
＜本文57～59ページ参照＞

○2011年度図書館情報学実習生の受入れ
［2011年８月30日（火）～９月８日（木）：実習生２名］
公募により愛知淑徳大学と立教大学の実習生を受け入れた。実習生は、カウンター業務、レファレンス・サービス、子どものへやのディスプレイ作成、読み聞かせ等の実習を行った。

○公益財団法人東京子ども図書館からの受託研修生の受入れ
［2012年２月１日（水）～３月28日（水）：研修生１名］
公益財団法人東京子ども図書館からの依頼により、同館の能力開発事業部資料収集・調査主任を受託研修生として受け入れた。研修生は、資料情報課の業

務を中心に実習を行った。

○大人のための「おはなし会」体験会

子どもを対象としたおはなし会を大人が体験する「大人のための『おはなし会』体験会」を2011年１月８日（土）、２月22日（火）、2012年１月28日（土）、２月７日（火）の８回（１日２回）実施した。土曜日の開催を設け、展示会のギャラリートークと合わせて参加できるようにした。2010年度は104名、2011年度は84名の参加があり、「人から本を読んでもらうことの楽しさを感じた」、「素話は絵が浮かんでくるようでとても面白かった」などの感想を得た。

(3) 学校図書館支援

○学校図書館セット貸出し

オセアニア・南極・北極セット

学校図書館への支援として、「国際理解」をテーマとする児童書等約50冊を「学校図書館セット貸出し」として全国の学校図書館へ貸し出している。セットは、子どもが本を通して世界の国々や人々への理解と共感を深められるよう、世界の国・地域に関する資料や現地で親しまれている昔話や絵本（原書も含む）など、幅広い資料で構成されている。ホームページでは、資料のリストや解題を掲載するとともに、セットを使って学校図書館活動や学習・読書活動を進めた実例を全国から集め、活用事例として紹介している。2002年から開始したセット貸出し事業は、2011年１月から「中南米セット」を、2012年１月から「オセアニア・南極・北極セット」をそれぞれ提供し、世界の諸地域を網羅する全９種類が完成した。2011年度は、延べ250校に計11,715冊の資料を貸し出した。また、2011年度は東日本大震災の被災地支援として、被災地域の学校に送料無料でセットを貸し出した。

＜本文53ページ参照＞

○学校図書館との連携による学習支援プロジェクト

公共図書館と学校・学校図書館との連携協力を目的に、調べ学習用のブックリストの作成・活用・評価等に関する情報を提供するため、2010～2011年度にかけて「学校図書館との連携による学習支援プロジェクト」を実施した。鎌田和宏氏（帝京大学文学部准教授）を主査に、2010年度は東京学芸大学附属竹早中学校、2011年度は東京都荒川区立第三峡田小学校及び東京都大田区立大森東中学校の協力を得て、調べ学習で使う本の選定や活用など、図書館による調べ学習の支援を試行した。プロジェクトの記録はホームページで公開した。2012年度には、その成果を『国際子ども図書館調査研究シリーズ』として刊行する。

2．子どもと本のふれあいの場としての活動

2.1　子どもの成長段階に応じた館内サービス

子どもが本や図書館にふれあう場「子どものへや」「世界を知るへや」「おはなしのへや」で、子どもと本をつなぐための様々な取組みをしている。

○子どものためのおはなし会

毎週土曜日・日曜日の午後２時（４歳～小学１年生を対象）と午後３時（小学２年生以上）にそれぞれ「おはなしのへや」で実施している。職員がストーリーテリングと絵本の読み聞かせを中心に行い、参加者には本のタイトルなどを記したプログラムと「おはなし会カード」（スタンプカード）を配布している。2011年度は計184回実施し、延べ1,163名が参加した。

○ちいさな子どものためのわらべうたと絵本の会

３歳以下の子どもと保護者を対象として、月に２回（第３土曜日※とそれにつづく日曜日の午前11時から）実施している。職員が絵本の読み聞かせとわらべうたを組み合わせ、その日の参加者の年齢に合わせたプログラムで行っている。2011年度は合計24回実施し、延べ194組437名が参加した。

※2012年度からは第２水曜日と第３土曜日に実施している。

○小展示

子どもが本を手に取りやすいよう、本の表紙を見せて書架に置き、小展示としている。「子どものへや」では季節に合わせたテーマで、「世界を知るへや」ではおもに開催中の展示会に関連させて、展示替えをしながら何度訪れても楽しめる工夫をしている。小展示リストはホームページに掲載している。

○夏休み読書キャンペーン

来館者の多い夏休みに、子どもが様々な本に出会えるための企画として本を読んで問題に答えるクイズを「子どものへや」で実施した。子どもの年齢に応じて、初級編・中級編・上級編の３つの問題を用意した。延べ1,104名の子どもが参加した。

○科学あそび2011

子どもの科学と科学の本への興味を育てるため科学あそびを行っている。2011年度は７月30日（土）、31日（日）にホールで小学生以上を対象に計２回実施した。科学読み物研究会の坂口美佳子氏を講師に迎え、「宇宙ってどんなとこ？～月の形がわかる早見盤をつくろう～」をテーマに行った。

結果を予想してから実験をするのが特徴で、真空状態での圧力や温度、音の変化を実験し、月齢早見盤などを作成した。職員は月をテーマにブックトークをした。小学生を中心に計81名の参加があった。ホームページに活動紹介を掲載した。

○子どものためのおたのしみ会

５月５日のこどもの日と秋の読書週間である11月５日（土）、６日（日）にそれぞれ２回ずつ、通常のおはなし会の特別版としておたのしみ会を行った。

11月のおたのしみ会は上野動物園と連携して「ゴリラの絵本と飼育員さんのおはなし」を行った。職員がゴリラや動物の絵本を読み聞かせし、上野動物園の飼育員がゴリラのエサや写真を見せて説明した。５月は45名、11月は39名が参加した。ホームページに活動紹介を掲載した。

○子どものための絵本と音楽の会

東京・春・音楽祭実行委員会と共催で、「東京・春・音楽祭」のイベントとして実施した。2011年３月27日（日）に予定されていたが、東日本大震災のため中止となり、予定していた内容を2012年３月25日（日）に実施した。絵本「はろるどまほうのくにへ」の山田美也子氏による朗読に合わせて、絵本のイメージで作曲・編曲された音楽をヴァイオリンとチェロの生演奏で楽しんだ。２回実施し、162名の参加があった。

○子どもの見学

幼稚園・保育園・小中学校、高等学校等、団体向けの見学を行っている。2011年度からは、小学生以下と中高生で見学のメニューを変えて実施した。小学生向けには見学とおはなし会を体験するプログラム、中高生向けには職業インタビューを中心とするプログラムでそれぞれ行った。33件701名の参加があった。このほか、夏休み中の火曜日に限り、学校単位でなく、個人単位で参加できる見学ツアーを、小学生と中高生向けに分けて全10回行った。計114人の参加があった。

2.2　本や読書、図書館に関する情報の発信

○国立国会図書館キッズページ

ウェブ上の子どもと本の出会いの場として2010年に公開し、2011年には、新たに、図書館ならではの道具の「なぜ？」「なに？」をクイズ形式で紹介する「なぜなに質問箱」を１月に、小学生が段階的に図書館の使い方と図書館での調べ方を学ぶことができる「しらべもの」を８月にそれぞれ公開した。また、「図書館員の１日」「よんでみる？」などの既存コンテンツの充実も進めた。

○国際子ども図書館子ども OPAC

2012年１月６日，小学生向けインターフェイスの蔵書検索システム「国際子ども図書館子ども OPAC」の本格稼働を開始した。子ども OPAC は、「国立国会図書館サーチ」のシステムの一部として2011年度に開発を行ったもので、識字や各種知識の習得途上にある児童が無理なく使えるような工夫が盛り込まれている。国際子ども図書館ホームページや国立国会図書館キッズページなどから利用できる。

３．子どもの本のミュージアムとしての活動

3.1　館内展示

国際子ども図書館では、子どもの本の持つ魅力を伝えるとともに、子どもと本との出会いの場を提供することを目的として、子どもの本・文化に関する展示会を行っている。

○日本の子どもの文学――国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み

［2011年２月19日～開催中　計320日：入場者数62,947人（2012年３月31日現在）］

国際子ども図書館所蔵資料から、明治から現代に至るまでそれぞれの時代を彩った代表的な児童文学作家・画家の作品を紹介するとともに、子どもが児童文学に接するひとつの機会である教科書及び教科書掲載作品、童謡作品を紹介している。また、著名な児童文学作家のコーナーも設け、半年ごとに入れ替えを行い全体で約270点を展示している。取り上げた作家は以下の通り。

第１回　2011年２月19日（土）～８月21日（日）石井　桃子
第２回　2011年８月23日（火）～2012年２月12日（日）小川　未明
第３回　2012年２月14日（火）～８月19日（日）谷川　俊太郎
第４回　2012年８月21日（火）～　宮沢　賢治

関連催物と開催日、参加者数は以下の通り。

・講演会「日本の子どもの文学―昨日・今日・それから」講師：神宮　輝夫（青山学院大学名誉教授、元国立国会図書館客員調査員）、宮川　健郎（武蔵野大学教育学部教授、国立国会図書館客員調査員）（2011年５月14日、参加者94名）
・ギャラリートーク（2011年６月４日・９月10日・2012年１月28日、参加者76名）
・講演会「谷川俊太郎さんに聞く―詩は絵本、絵本は詩―」講師：谷川　俊太郎（詩人）、宮川　健郎（武蔵野大学教育学部教授、国立国会図書館客員調査員）（2012年２月18日、参加者105名）

＜本文42～46ページ参照＞

○世界をつなぐ子どもの本
―2010年国際アンデルセン賞・IBBY オナーリスト受賞図書展

［2011年８月６日～９月11日　計31日：入場者数6,037人］

国際児童図書評議会（IBBY）の日本支部である社団法人日本国際児童図書評議会（JBBY）との共催で、JBBY が所蔵する2010年国際アンデルセン賞受賞者の作品及び IBBY オナーリスト推薦作品、合計約200冊を、手に取って見ることができるよう展示した。

○ヴィクトリア朝の子どもの本：イングラムコレクションより

［2011年10月５日～12月25日　計64日：入場者数10,065人］

国際子ども図書館所蔵特別コレクションの一つである「イングラムコレクション」より、ヴィクトリア朝イギリスを代表する児童文学作品約60点を展示し、絵本やファンタジー、冒険小説など現代に連なる近代児童文学の様々なジャンルの成立過程を探るとともに、同コレクションの魅力を紹介した。

関連催物と開催日、参加者数は以下の通り。

・講演会「イングラムコレクションの愉しみ」講師：神宮　輝夫（青山学院大学名誉教授、元国立国会図書館客員調査員）（2011年10月８日、参加者112名）

＜本文47～51ページ参照＞

○新春　龍づくし

［2011年12月27日～2012年１月29日　計22日：入場者数2,514人］

2012年の干支の辰にちなみ、世界約30か国の龍が登場する絵本・児童書47点を展示し、アジアの龍、中東の龍、アフリカの龍、ヨーロッパの龍など、世界各地で描かれる龍の違いや魅力を紹介した。

○子どもの健やかな成長のために―厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財（出版物）の紹介

［2012年２月21日～３月11日　計18日：入場者数1,584人］

厚生労働省雇用均等・児童家庭局との共催で、児童福祉文化財（平成22年度出版物委員会推薦分）60点を、手に取って自由に閲覧できる形で展示した。

○資料室での小展示

第一資料室と第二資料室では、書架の一部を使用して小展示を行っている。

第一資料室では資料室の研究書を用いて、当館で開催する展示会や講演会に連動した小展示を期間中に８回企画し、利用者の興味・関心を深める一助となるよう努めた。

また、一年前に日本の主要な児童図書賞を受賞した作品と、児童サービスの基本資料の小展示を通年で実施している。

第二資料室の小展示

第二資料室では外国書を中心とした小展示を９回実施した。当館所蔵の外国の児童書により親しんでもらえるようなテーマを選び、展示資料に解題を付して提供している。

3.2　電子展示

○絵本ギャラリー

「絵本ギャラリー」は、絵本の発祥から20世紀初頭までの発展の流れを、内

外の貴重な絵本の画像や音声により紹介する電子展示会コンテンツである。2011年５月５日には、「『幼年画報』掲載作品検索」の新規公開、「『コドモノクニ』掲載作品検索」への画像追加を行った。

（http://www.kodomo.go.jp/gallery/index.html）

○「日本発☆子どもの本、海を渡る」（英語版）

開館10周年と2010年国民読書年を記念して開催した展示会「日本発☆子どもの本、海を渡る」は、日本の児童書がどのように海外で翻訳出版され広まっていったかというテーマで、海外からの関心も高く、電子展示会の英語版を2012年１月18日に公開した。

（http://www.kodomo.go.jp/anv10th/e/index.html）

3.3　国際子ども図書館の建物と活動の紹介

○パネル展示「国際子ども図書館の歩みと取組み」

［2011年４月24日～５月８日　計10日：入場者数2,101人］

国際子ども図書館の歴史と取組みを解説するパネル展示、学校図書館セット貸出しの現物展示、パンフレット・リーフレット等の配布をホールで行った。

４．内外諸機関との連携・協力、広報活動等

○第９回国際子ども図書館連絡会議

［2011年６月15日（水）］

国際子ども図書館の2010年度の活動について報告し、2011年度の取組等について国際子ども図書館と協力関係にある諸機関から意見聴取等を行うため、連絡会議を開催した。財団法人大阪国際児童文学館、大阪府立中央図書館、国際子ども図書館を考える全国連絡会、国立教育政策研究所社会教育実践研究センター、独立行政法人国立青少年教育振興機構子どもゆめ基金部、社団法人全

国学校図書館協議会、公益財団法人東京子ども図書館、社団法人読書推進運動協議会、社団法人日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、社団法人日本図書館協会、特定非営利活動法人ブックスタート、文部科学省（生涯学習政策局社会教育課、初等中等教育局児童生徒課）の14機関・団体が参加した。会議の後半には、東日本大震災復興支援に係る取組について各機関・団体が報告を行った。

○図書館総合展への参加

2011年11月９日（水）から11日（金）まで、第13回図書館総合展に参加し、国立国会図書館の展示ブースでパンフレットやパソコンを用いて様々なサービスを紹介するほか、ディスプレイを使ったプレゼンテーションを実施した。

図書館総合展会場

○刊行物

・『国際子ども図書館の窓』第11号※
・『平成22年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録「日本の児童文学者たち」』※
・『国際子ども図書館調査研究シリーズ第１号「児童サービス研修のいまとこれから」』※
・展示会「日本の子どもの文学――国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」小冊子（一般向け（日本語、英語）、子ども向け）
・国際子ども図書館コレクション紹介「イングラムコレクション」
・国際子ども図書館パンフレット（日本語、英語）
・利用案内：一般向け（日本語、英語、ハングル、中国語）、子ども向け（日本語）
・リーフレット「絵本ギャラリー」（日本語、英語）、「明治の煉瓦建築国際子ども図書館」、「たてもの探検」、「学校図書館へのサービスのご案内」、「学校

図書館セット貸出し活用事例の紹介―本を読んで世界を知ろう」※
・国際子ども図書館メールマガジン
（※は国際子ども図書館ホームページ（http://www.kodomo.go.jp/）に PDF 版を掲載）

○ホームページのリニューアル

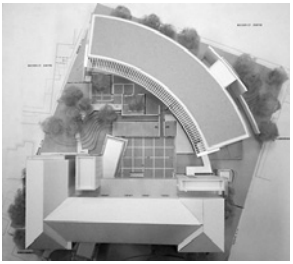
2011年４月23日、ホームページを全面リニューアルした。国際子ども図書館は、2010年９月に「子どもの読書活動推進支援計画2010」を策定し、図書館等の子どもの読書活動推進に関連する取組を支援している。今回のリニューアルでは、支援の一環として、ホームページを通じた、児童書や子どもの読書に関する情報発信を強化した。また、求める情報へのアクセスを容易にするため、トップページに利用者の目的別の入り口を設けるとともに、デザインを一新した。

５．全体計画、施設計画等

5.1　国際子ども図書館第２次基本計画

2011年３月に新たに「国際子ども図書館第２次基本計画」を策定・公表した。この計画は、国際子ども図書館設立に際して策定された「国際子ども図書館基本計画」（平成８年国図上第15号）の後継に当たるものである。「子どもの本は世界をつなぎ、未来を拓く！」という当館設立の理念の実現に向けて、子どもの本に関わる活動や調査研究を支援するという当館の使命を改めて明確化し、当館が果たすべき３つの基本的な役割として「児童書専門図書館」「子どもと本のふれあいの場」「子どもの本のミュージアム」を掲げた上で、増築改修後に実現を目指すサービスと、これらに必要な施設や組織の在り方について明らかにしたものである。この計画の詳細については、『国立国会図書館月報』№602（2011．5）のほか、全文は当館ホームページ（http://www.kodomo.go.jp/about/law/basicplan2.html）をご覧いただきたい。

5.2　増築・改修工事


増築工事後の予想図

増築・改修工事については、2009年度から設計を進めてきたところであるが、2012年春に着工し、2015年夏の竣工を予定している。増築棟は、既存棟に隣接して、地上３階・地下２階、延べ床面積約6,200平米の規模となる（図の上側）。地下部分に書庫を設けることで将来的に100万冊規模の収蔵を可能にするほか、地上部分には現在２つに分かれている資料室を統合して調査研究環境の向上を図る。また、子どもの読書に関わる人材育成支援のための研修室の新設や、執務環境改善による業務効率の向上を図るなど、児童書専門図書館としての機能の充実を図る。

一方、既存棟については、増築棟に移転する資料室跡地を活用して、図書館を活用した調べ学習のモデルを体験できる部屋や、展示機能の拡充を図る。歴史的建造物としての魅力をいかし、子どもから大人まで幅広い人が子どもの本の魅力に触れることができる施設として、必要な改修工事を予定している。詳細は当館ホームページ（http://www.kodomo.go.jp/about/future/design.html）をご覧いただきたい。

数字で見る！国際子ども図書館

（１）国際子ども図書館所蔵統計（2012年３月31日現在）

資料区分						2012.3.31現在 所蔵数
資料情報課	図書（単位：冊）		日本語	児童書（＊１）		234,834
				児童書関連書、参考図書		17,388
			小計			252,222
			外国語	児童書（＊１）	欧米言語	52,092
					アジア言語	24,118
				児童書関連参考書		4,300
			小計			80,510
		計				332,732
	逐次刊行物（単位：タイトル）	雑誌	日本語	児童雑誌		1,404
				児童関連誌		794
			外国語	児童雑誌	欧米言語	45
					アジア言語	27
				児童関連誌	欧米言語	96
					アジア言語	10
		小計				2,376
		新聞	日本語			12
			外国語			1
	非図書資料（＊２）（単位：点）	静止画、紙芝居（＊３）				1,735
		カード、カルタ（＊３）				184
		マイクロフィルム				2,076
		マイクロフィッシュ				35,924
		録音資料（レコード、CD、カセットテープ）（＊４）				1,891
		映像資料（ビデオテープ、ビデオディスク）				6,536
		電子資料（光ディスク、磁気ディスク）				6,296
児童サービス課（＊５）	図書（単位：冊）		日本語			17,946
			外国語			2,614
			小計			20,560
	逐次刊行物（単位：タイトル）					20
	非図書資料（単位：点）					280

※2012年から新システムに基づいた集計方法に変更。
付随して、集計単位を一部変更。

＊１　学校教科書、教師用教科書、学習参考書、楽譜（冊子）、組み合わせ資料を含む
＊２　教師用指導書、児童書関連書のうち非図書形態のものの数を含む
＊３　タイトル数で集計
＊４　教師用指導書のみ（児童書音楽資料は未所蔵）
＊５　児童サービス課分には、学校図書館セット貸出し用資料を含む

（２）来館者統計

★2010年度（2010年４月１日～2011年３月31日）

開館日（日）	286
来館者（人）	116,899
（うち中学生以下）	(16,262)

★2011年度（2011年４月１日～2012年３月31日）

開館日（日）	286
来館者（人）	101,822
（うち中学生以下）	(14,912)

（３）各室利用統計

★2010年度（2010年４月１日～2011年３月31日）

第一資料室	開室日（日）	236
	利用者（人）	7,524
第二資料室	開室日（日）	236
	利用者（人）	4,673
子どものへや・世界を知るへや	開室日（日）	286
	利用者（人）	59,971
	（うち中学生以下）	(15,970)
メディアふれあいコーナー	開室日（日）	286
	利用者（人）	45,541

★2011年度（2011年４月１日～2012年３月31日）

第一資料室	開室日（日）	234
	利用者（人）	7,569
第二資料室	開室日（日）	234
	利用者（人）	4,567
子どものへや・世界を知るへや	開室日（日）	285
	利用者（人）	54,666
	（うち中学生以下）	(15,885)
メディアふれあいコーナー	開室日（日）	286
	利用者（人）	40,035

※本のミュージアムの統計は「活動報告」参照のこと。

（４）資料出納統計

★2010年度（2010年４月１日～2011年３月31日）

国会サービス用	件	145
	点	149

第一・第二資料室	件	11,707
	点	25,564

★2011年度（2011年４月１日～2012年３月31日）

国会サービス用	件	105
	点	105

第一・第二資料室	件	18,197
	点	30,054

（５）複写サービス利用統計

★2010年度（2010年４月１日～2011年３月31日）

（国会サービス用）

紙	件	5
	枚	35
プリントアウト	件	0
	枚	0
マイクロ	件	0
	フィルムコマ	0
	フィッシュ枚	0

（対象：一般）

紙	件	5,194
	枚	30,068
プリントアウト	件	7
	枚	94
マイクロ	件	6
	フィルムコマ	46
	フィッシュ枚	0

★2011年度（2011年４月１日～2012年３月31日）

（国会サービス用）

紙	件	3
	枚	5
プリントアウト	件	0
	枚	0
マイクロ	件	0
	フィルムコマ	0
	フィッシュ枚	0

（対象：一般）

紙	件	5,450
	枚	28,541
プリントアウト	件	292
	枚	4,723
マイクロ	件	1
	フィルムコマ	9
	フィッシュ枚	0

（6）資料貸出統計

★2010年度（2010年4月1日～2011年3月31日）

（対象：行政・司法各部門）

相互貸出し	件	33
	点	33

（対象：一般）

図書館間貸出	件	329
	点	332
学校図書館セット貸出	件	172
	点	8,016
展示会出品資料貸出	件	1
	点	1

★2011年度（2011年4月1日～2012年3月31日）

（対象：行政・司法各部門）

相互貸出し	件	51
	点	51

（対象：一般）

図書館間貸出	件	307
	点	307
学校図書館セット貸出	件	250
	点	11,715
展示会出品資料貸出	件	1
	点	10

（7）レファレンスサービス統計

★2010年度（2010年4月1日～2011年3月31日）

（国会サービス用）

文書回答	処理文書(通)	0
	処理(件)	0
電話回答	受理(件)	0
	処理(件)	0
口頭回答	受理(件)	0
	処理(件)	0
調査局経由※	処理(件)	4

（対象：行政・司法各部門）

文書回答	処理文書(通)	0
	処理(件)	0
電話回答	受理(件)	0
	処理(件)	0
口頭回答	受理(件)	0
	処理(件)	0

※「調査局経由」は調査及び立法考査局で受付後、回付されたもの

（対象：一般）

文書回答	処理文書(通)	102
	処理(件)	276
電話回答	受理(件)	1,398
	(うち18歳未満)	(7)
	処理(件)	1,998
	(うち18歳未満)	(12)

（対象：一般＜続き＞）

口頭回答	受理(件)	9,665
	(うち18歳未満)	(936)
	処理(件)	12,139
	(うち18歳未満)	(1,149)

★2011年度（2011年４月１日～2012年３月31日）

（国会サービス用）

文書回答	処理文書(通)	0
	処理(件)	0
電話回答	受理(件)	1
	処理(件)	1
口頭回答	受理(件)	1
	処理(件)	6
調査局経由※	処理(件)	2

（対象：行政・司法各部門）

文書回答	処理文書(通)	0
	処理(件)	0
電話回答	受理(件)	1
	処理(件)	1
口頭回答	受理(件)	0
	処理(件)	0

※「調査局経由」は調査及び立法考査局で受付後、回付されたもの

（対象：一般）

文書回答	処理文書(通)	93
	処理(件)	234
電話回答	受理(件)	1,211
	(うち18歳未満)	(3)
	処理(件)	1,634
	(うち18歳未満)	(3)

（対象：一般＜続き＞）

口頭回答	受理(件)	7,261
	(うち18歳未満)	(890)
	処理(件)	9,470
	(うち18歳未満)	(1,107)

（８）参観・見学統計

★2010年度（2010年４月１日～2011年３月31日）

利用説明会			件	43
			人	306
			(うち18歳未満)	(43)
参観・見学	国内	個人	件	64
			人	688
			(うち18歳未満)	(66)
		団体	件	78
			人	1,535
			(うち18歳未満)	(784)
		図書館関係者	件	6
			人	46
			(うち18歳未満)	(0)

		地方自治体・地方議会関係者	件	0
			人	0
			（うち18歳未満）	(0)
	海外（外国公館関係者を含む）		件	23
			人	129
			（うち18歳未満）	(1)

★2011年度（2011年４月１日～2012年３月31日）

参観・見学※	国内	個人	件	102
			人	890
			（うち18歳未満）	(65)
		団体	件	65
			人	1,199
			（うち18歳未満）	(925)
		図書館関係者	件	11
			人	163
			（うち18歳未満）	(0)
		地方自治体・地方議会関係者	件	5
			人	20
			（うち18歳未満）	(0)
	海外（外国公館関係者を含む）		件	15
			人	118
			（うち18歳未満）	(4)

※2011年度から利用説明会は参観・見学に統合した。

（９）国際子ども図書館ホームページアクセス統計

★2010年度（2010年４月１日～2011年３月31日）

http://www.kodomo.go.jp/以下の全コンテンツ	ページビュー（件）	2,601,469
トップページ［日本語版］	トップページのアクセス（件）	316,774
トップページ［英語版］	トップページのアクセス（件）	6,607

★2011年度（2011年４月１日～2012年３月31日）

http://www.kodomo.go.jp/以下の全コンテンツ	ページビュー（件）	2,466,672
トップページ［日本語版］	トップページのアクセス（件）	288,608
トップページ［英語版］	トップページのアクセス（件）	7,587

国際子ども図書館利用案内

ホームページ　http://www.kodomo.go.jp/

電話　03（3827）2053（代表）　03（3827）2069（録音による利用案内）

☆来館利用　問い合わせ先：企画協力課　ホームページ ＞ 利用案内

どなたでも利用できます（ただし、第一資料室・第二資料室は満18歳以上の方）。

開館時間　9:30～17:00　資料請求　9:30～16:30（於　第一資料室・第二資料室）

休館日　月曜日、国民の祝日・休日（こどもの日は開館）、年末年始（12月28日～１月４日）、毎月第３水曜日（資料整理休館日）

休室日　休館日のほか、以下の日が休室日となります。

２階　第一資料室・第二資料室：日曜日

３階　本のミュージアム：展示会準備等のための休室日

所蔵資料　国内で出版された児童図書・雑誌、外国語の児童図書・雑誌、児童書関連図書・雑誌等

※資料の利用は館内のみ。館外への帯出はできません。

☆レファレンス・資料案内　問い合わせ先：資料情報課情報サービス係

ホームページ ＞ 本・資料を探す

児童書・児童文学、児童図書館活動等に関するお問い合わせにお答えします。

◆申込方法：来館、図書館経由（文書）、電話

※資料を直接確認しなければならないなどの時間を要する調査、及び聞き間違いが生じやすい外国語文献についてのレファレンスは文書でお願いします。

☆資料の複写（有料）　問い合わせ先：資料情報課情報サービス係

ホームページ ＞ 利用案内 ＞ 複写サービス

◆申込方法：来館、NDL-OPAC 経由（登録利用者・機関のみ）、郵送（登録利用者・機関のみ）

☆資料の図書館間貸出し　問い合わせ先：資料情報課情報サービス係

ホームページ ＞ 利用案内 ＞ 図書館間貸出し

「図書館間貸出制度」に加入している図書館のみが対象となります。

※雑誌や昭和25年以前刊行の図書など貸し出しできない資料もあります。

☆見学・ツアー　問い合わせ先：（一般向け）企画協力課企画広報係、（児童・生徒向け）児童サービス課

ホームページ ＞ 利用案内 ＞ 見学・ツアー

☆学校図書館セット貸出し　問い合わせ先：児童サービス課企画推進係

ホームページ ＞ 子どもの読書活動推進 ＞ 学校・学校図書館へのサービス ＞ 学校図書館セット貸出し

「国際理解」をテーマとする児童書約50冊を学校図書館に貸し出します。

※セットに含まれる資料の解題をホームページでご覧いただけます。

＜編集後記＞

「国際子ども図書館の窓」は、この第12号から毎年秋に刊行することといたしました。前号11号以後の2011年１月から2012年３月までの活動報告及び2010年度、2011年度の２年分の統計を収録しています。

これからは国際子ども図書館の活動をお伝えするほか、子どもの読書に関わる調査研究など、子どもと本をつなぐ人のための様々な情報を発信していきます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

国際子ども図書館の窓　　第12号　2012.9

発行所　国立国会図書館　**国際子ども図書館**　2012年９月25日発行
編集責任者　坂田　和光
〒110-0007　東京都台東区上野公園12-49
電　話　03（3827）2053（代表）　ＦＡＸ　03（3827）2043
E-mail　info@kodomo.go.jp　ホームページ http://www.kodomo.go.jp/
印刷所　株式会社 山越

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分はそれぞれ筆者の個人的見解です。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に国際子ども図書館企画協力課協力係に連絡してください。

ILCL

The Window

the journal of the International Library of Children's Literature

No.012 September 2012

Contents

【Frontispiece】

【Foreword】 Kazuko Sakata 1

【Research reports】

The Great East Japan Earthquake and support for children's reading and school libraries Yumiko Kasai 3

Children's literature in Ireland : passing down the memory of the people to children Satoko Morino 8

Children's books in Latvia Ayumi Kurosawa 18

Children's books in Indonesia : past and present Sylvia Tjokrowati Mihira 29

Cooperation forum for children's services FY2011 : public libraries' learning support for schools and school libraries Children's Services Division 39

Concept and details of the exhibition "Japanese children's literature : a history from the International Library of Children's Literature" Takeo Miyakawa 42

Our new program of the small collection exhibition, "Children's Books in the Victorian Era ; from the Winnington-Ingram Collection" Kazuhiko Fujimoto 47

【Column】

The Great East Japan Earthquake and the International Library of Children's Literature Yumi Tobita 52

【International exchange】

International exchange on the Caribbean island! : 77th IFLA General Conference Naoko Kobayashi 54

Lecture "Children's books in the Occupation Period : from the Gordon W. Prange Collection" Planning and Cooperation Division 57

The list of foreign visitors and guests Planning and Cooperation Division 60

【Column】

Digitization of our children's magazine collections Hiroko Ito 61

【The list of events and activities ; January, 2011-March, 2012】 63

【ILCL activity report】 65

【ILCL in figures】 83

【ILCL user guide】 89

NATIONAL DIET LIBRARY
Tokyo

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。